

翻刻 名古屋市蓬左文庫蔵「幸若音曲本」(八)

— 敦盛・鎌田・わた・笈さかし —

服部 幸造

(承) 翻刻 名古屋市蓬左文庫蔵「幸若音曲本」(一) — 夜討曾我

・信田・十番切・大臣 — (名古屋市立大学人文社会学部研究紀要
第9号 二〇〇〇年十一月)

翻刻 名古屋市蓬左文庫蔵「幸若音曲本」(二) — 兵庫・はま
出・清重・俊寛・新曲・やしま — (名古屋市立大学人文社会学部
研究紀要 第10号 二〇〇一年三月)

翻刻 名古屋市蓬左文庫蔵「幸若音曲本」(三) — 安宅・一満
箱王・景清 — (名古屋市立大学人文社会学部研究紀要 第11号
二〇〇一年十一月)

翻刻 名古屋市蓬左文庫蔵「幸若音曲本」(四) — 未来記・腰
越・鞍馬出・馬揃・高館 — (名古屋市立大学人文社会学部研究紀
要 第12号 二〇〇二年三月)

翻刻 名古屋市蓬左文庫蔵「幸若音曲本」(五) — 伏見常繁・
小袖乞・しつか — (名古屋市立大学人文社会学部研究紀要 第13
号 二〇〇二年十一月)

翻刻 名古屋市蓬左文庫蔵「幸若音曲本」(六) — 元服曾我・

名古屋市立大学人文社会学部研究紀要 第二十号 二〇〇六年三月

入鹿・日本記・笛の巻・文学 — (名古屋市立大学人文社会学部研
究紀要 第15号 二〇〇三年十一月)

翻刻 名古屋市蓬左文庫蔵「幸若音曲本」(七) — 四国落・常
繁問答・烏帽子折・正尊 — (名古屋市立大学人文社会学部研究紀
要 第17号 二〇〇四年十一月)

(敦盛)

抑此度一の谷の合戦。御一門侍大将惣して以上十六人の組あしの中に。
ものゝ哀をとゝめしは。相国に御弟。恒盛の子息。無官の太輔敦盛に
てことに哀をとゝめたり。其日の御装束へには。梅の匂のはだよせ
のゆふなるに唐紅をめされ。ねりぬきに色々の糸をもつて。秋の野に
草尽し縫たるひたゝれ。弓手のてつかひ両めんの臍当。むらさきすそ
ごの御きせなか。こかね作りの御はかせ。十六さいたる染羽の矢。村
重藤の弓。連泉葦毛(一才)

なる駒に。梨地蒔白覆輪の鞍をかせ。御身かろけに召れたり。めされ
たる御馬。鎧の毛に至るまで実ゆゝしくそ見えられける。御一門とお
なしく主上の御供め(申)され。はまに下らせ給ひしか。御運の末の
かなしきは。漢竹のやうちやう(てう)を内裏に忘れさせ給ひ。捨て
も御出あるならばさまての事の有間敷を。若上臈のかなしきは。且は
此笛を忘たらん事共を。一もんの名おりと思召し。取に帰らせ給ひて
かなた。こなたの時刻にはや。一門の御(一ウ)

座舟を遙の沖へおし出す。敦盛は御覽して。いや／＼かなふましいと

思召し。塩やのはたを心かけ。駒に任せて只一騎心ほそくも落られけり。かゝつし処に。武蔵の国の住人。熊谷の次郎直実は。此度一の谷の。先陣とは申せ共。させる高名究すして。無念たくみはなかりけり。あつはれ爰元を。よからんかたきか通れかし。無手とひつくんで。ふんどりせはやと思ひ。渚にそうて下りしか。敦盛を見付申。なゝめならずによるこんで。駒の手綱うつす多て大(2才)

音上て呼はる。あれに落させ給ふは。平家にとつて。もよき大将と見こめ申て候。まさなくも鎧のあげまさかいたを。敵に見せさせ給ふ物かな。引かへし御勝負あれ。かう申兵者をいかなる者とおほしめす。武蔵の国の住人。しのたうのはたかしらへに。熊谷の次郎直実にて候。(かたきにおきても能かたきそうそ)引かへし御勝負あれ(候へ)。いかにくにとて追かけ申。あらいたはしや敦盛。熊谷と聞からにのかれかたくはおほせ共。駒をはやめて落させ給ふか。はるか沖を御らんすれは御座舟近くうかんたり(2ウ)

。あの舟を招よせ。のらふする物と思召し。腰よりも紅に。ひを出したる扇をぬき。「カ、ルフシ」はらりとひらかせ給ひて。「同」沖なる舟を。目にかけてひらりくと。まねかる。船中の人々に。人して(も)こそ多(キ)に。門脇殿は。御覧して。ほろかけ武蔵の舟まねくは。左馬のかみゆきもりか。無官の太輔。敦盛かあれを。見よとの。御説なり。悪七兵衛承り。いつくにさうと。申て。ふなはりに。つつ立あかり。長刀を杖につき。甲をぬいてきつと見て。痛はしの御事や。何として。御座(3才)

舟に召をくれさせ給ひけん。恒盛の御子息に。無官の太輔。敦盛にて。渡らせ給ひ候そや。召れたる御馬の毛。鎧の毛に至るまで。まかふところも。ましまさすいたはしさよと。申けり。門脇殿は。聞召し。敦盛ならば。此舟を。おし寄てたすけよ。すいしう梶取承はり。ろかひ梶をたてなをし。舟を渚によせんとす。此程二三日。吹しほりたる。北風の名こりの。浪はけふもたつ。かせはきおつて。波はかう(こ)う)じやのこことくなり。はくらうせかひを洗ひ。砂を天に。上くれは(3ウ)

た、雪の山のことくなり。小船こそ自。弓手へもめてへも。思ふさまにはあつかはるれ殊に。すぐれたる大船に。大せいは召れたり。たつたむ波にせかれつ。次第く。に出れ共磯へ。よるへき。やうはなし。「ツメ同」敦盛此よし御覧して。いやく此馬を。海上に打ひて。およかせてあの舟に。のらふす物と思召し。駒の手綱かいくつて。海上に打ひて。うきぬしつみぬおよかせらる。いたはしや敦盛の。老武者にてましますは。さんづにのりさかつて時々こゑをかけ給は。御馬は一逸なり(4才)

。沖の御さ舟に。なんなく馬は着へきに。若武者のかなしさは。馬にはなれてかなはしと。思召れける間。まへかさに乗かゝつて左右の鎧をつよくふみ。手綱にすかり給ひて。うきぬしつみぬおよかせらる。馬一逸とは申せ共。たむ波にせかれつはやおよきかねてそ見えにける。くまかへ此由見参らせ。まさな平家や。沖の御さ舟ははるか程をへたてつ。しかもなみ風あらふして。いかてか叶はせ給ふへ

き。引かへし御勝負あれ。さなき物ならば。中さしを参らせんと。弓と矢を(4ウ)

打つかつてそゝろひいてそ懸りける(へり)。敦盛此よし御覧して。中々さひ矢に射ひてられ一門の名おりと思召し。駒の手綱引かへして。遠浅に成しかは水まりはつとけさせて。なかさしとつて打つかひかうこそ詠し給ひけり。「サシイロ」あつさ弓。矢をさしはけて引ときは。返す事をは。知るかそも君。「コトハ」熊谷も心有兵者にてあつと思ひ。「イロ」左右の鎧をけはなつて返哥とおほしくて。かくはかり。「」いたつきの。はやはつれんと思ひしに。矢と云こゑに。立そとゝまる「コトハ」か様に詠して待(5オ)

請申。去間敦盛。弓矢をからりとなけ捨。御はかせひんぬいてうけて見よとて討れたり。熊谷さらりとうけなかし。とつてなをしてちやうとうつ。二打三打。ちやうく〜と打合。互に勝負見えされは。よれくまん。尤とて。うち物互にからりと捨。鎧の袖を引ちかへ。むすくとんで二人か。両馬の相にとつとおつか。荒いたはしや敦盛。心はたけくいさせ給へ共。ひね武者の熊谷にて事の教とはせず。やす〜ととつておさへ申。甲ちきつてからりと捨。腰の刀をひんぬいて。くび(5ウ)

をとらんとしたりしか。余り手よはく思ひ。指うつむいてさうかうを見奉るに。うすけしやうにかねくろく。まゆふとうはかせ。さもやことなき殿上人の。年暦(へれい)十四五かと見えさせ給ふ。熊谷少おしくつろけ申。上臈は平家方にては。いかなる人の公達にて御座候そ。

名古屋市立大学人文社会学部研究紀要 第二十号 二〇〇六年三月

御名字を御名乗候へ。「サシクトキ」あらいたはしや敦盛老武者の熊谷に。くみしかれさせ給ひ。よにくるしけなる息を。つき。「コトハ」実や熊谷は。文武二道の名人とこそきゝしに。何とてかせんに法なき事をは申そ。我等は天下の(6オ)

てうしんとし。うんかくのさしきにつらなつて。詩哥管絃をのみ。てう(へちやう)じたりし身なりしかとも。此二三ケ年は(間)。一門の運つき。ていとをあくかれ出しよりこのかた。武士のいさめる法をあら〜きいて候そや。それ人の名乗と云は。互の陣にむらかつて。軍みたれの折から。矢なき箆を腰に付。つはなき太刀をもつて。是はそんぢやう其国のなにかし。たれかしたのつて。うち物の勝負をし。又くんで勝負をけつするとこそ聞しに。我は敵におさへられ。下よりも名乘法(6ウ)

とは今こそきいて候らへ。あふ心得たり熊谷。名字をなのらせくびをとつて。汝か主のきけいにみせん為な。「サシクトキ」よし〜それは世にはかくれも有ましきそ。たゝなに(それ)かしかくびをとつて。汝か主のきけいにみせよ。見しる事も有へし。それか見しらぬ物ならばかばのくわんじやにみせとへ。「フシ同」かま(こ)のくわんじやか。見しらすは。此度平家の生捕のいかほとも。多く有へきに。引むけてみせとへ。それか見しらぬものならば。名もなきものゝくびそと思ひて。草村に捨をけよすてゝの後は。用もなし(7オ)くま。かへとこそ。仰けれ。「コトハ」熊谷余りのいたはしさに。又御顔を見奉るに。「サシイロ」せんけんたる両ひんは秋の蟬の羽にた

くぬ。えんでんたりしさうがは。遠山の月に相同し。業平のいにしへ。片野へののかり衣。袖打払ふ雪の下。すいたいこうかん。きんしうの粧を。「フシ同」縦は。絵には写とも。此上臈の。御姿を筆にもいかに尽すへき。「コトハ」扱は上らうは。武士のいさめる法をは秀しろし召れすへぬや。よに物うきは我等にて候。君の御意に随て。身をたす(7ウ)

けんと思へは。親と戦へあらそい。子と戦へた。か。はからさる罪をのみ作るは武士の習なり。「サシクトキ」花の本(下)の半日のかく月のまへの一夜の友。せいふうらうけつ飛花落葉のたはふれも。今生ならさるへぬきへんと承る。この度の合戦に。人しもこそ多きに。熊谷か参逢事を前世の事と思召し。御名乗候らへ。御くびをたまはつて。「フシ同」た。奉公の。其忠に後世を。訪ひ申へし。敦盛は。聞しめし。名のらし物とは思へ共。後世をとはんす嬉敷に。さらは名乗てきかすへし。我をは誰とかおもふ(8才)

らん。忝も。浄海の。御舍弟にておはします。門脇の。修理の太夫。恒盛の三男に。いまた無官のかりなにて。太輔敦盛。正年は十六歳。軍は。是か始なりさのみに物な。尋そ。はや。くひとれや。くまかへ「コトハ」熊谷承り。扱は上臈は。桓武の御末にて御さ有けるや。御年は十六歳。我が子へなにかしかやくし。の直家も。扱は御同年に参りて候や。さへか。ほとなき直家。みめ悪く色黒く。情も知らぬ東夷と思へ共わか子と思へは不便なり。むさんや直家。直実もろともに出。今朝一の谷の大手にて。かたき(8ウ)

まれいの三郎か放矢を。弓手のかいなにうけとめ。何かしに向て手を負て候と申せしを。いた手か薄手かと。問はやとは思ひしか。いや。熊谷程の弓取か。かたきみかたのまの前にてとふへきかと思ひ。はつたとにらんで。あらゆふにかいな直家や。其手か大事ならば。そこに腹をきれへり候へ。又薄手にても有ならば。かたきと逢て討死をせよ。「サシクトキ」みかたの陣を枕としのたうの名はしくたすなと云てあれは。まことそと思ひ。へなにかしかたを又二目とも見ずし。かたきの中へかけ入てより後は其行をも存ぜず。さても(9才)

くまかへ。此度の合戦に。つれなく命なからへ。武蔵の国に下りつ。直家か母にあひて。討れたると云ならば。「フシ同」甘露の母か。歎へし。恒盛とやらんもへ。花のやうなる若君を。渚に一人残しをき。さこそは歎かせ給ふらめ。恒盛の御愁歎とさて。直実か思ひを。物に能々とふれは。流水おなし。水なれと洩瀬に。かはる。ことくなり。「コトハ」いや。此君の御くびを給はり。直実かおんしやうに預りてあれはとて。千年をたもち。扱万年のよはひかや。末代の物語に。たすけ申さはやと思ひ。なふ(9ウ)

いかに敦盛。平家かたにて仰有へらるへき事は。武蔵の熊谷と。波打きわにて。くみはくんで有つれ共。我子のへに。直家に思ひかへなすらへ。助申て候と。御物語候らへとて。とつて引立奉り「カ、ルツメ」鎧についたるちり打払ひ。「同」馬にだきのせ奉り直実もともに馬にのり。西をさいて。五町計行過て。後を急度見てあれ

は。近江源氏の太将に。めかた馬淵いわみつゐ。四目結のはたさゝせ。五百騎計ておつかくる。弓手をみてあれは。成田平山ひかへたり。めてを見ければ。土肥殿七騎でおつかくる(10才)

上の山には。御太将判官。白幡をさゝせ。御近衆にとつては。武蔵坊弁慶。常陸坊戒尊。亀井片岡いせ駿河此人々を先として。声々に申様。むさしの熊谷は。かたきとくんつるか。既にたすくは二心と覺たり。二心有ならはくまかへともうちとれと我もく追懸る。此君のありさま。ものに能々とふれば。籠の内の鳥とかや網代のひほの如くにて。もりて行へ出へきやうはなし。人手にかけ申さんよりも。直実か手にかけて。後世を某。訪はやと思ひて又むすくとくんでどうと落(10ウ)

。痛はやし御くびを水もたまらすかき落し。めより高く指上て鬼のやうなる熊谷も東西を知らず鳴めたり。「コトハ」涙をとめ御死骸を。かなたこなたへおしうこかして見奉るに。御鎧の引合に。漢竹のやうてうを。したんのいゑにひちりきを入れてさゝれたり。又めての御脇に。巻物とおほしきものあり(二巻候らひけり)。何成らんと見てあれは。いたはしや敦盛の。都出の言の葉をくれくそかれ(あそはし)けれ。此君都におはせし時は。あぜつしの大納言。助方の卿の姫君の。十三にならせ給ひしか。天下一の美(11才)人たりしを。仁和寺御室の御所にて。月次の管絃の有し時。敦盛は笛の役。おなしがくごにて。琴ひき給ひし其姿を。一目見しより恋と成て。「サシイロ」哥によみ文に書こさるゝ。その文数の重なりて逢瀬

の中となり給ひ。中三日と申(せし)に平家帝都のくわらへくを去て。西海のはとふに趣給ふ。「コトハ」あらいたはしや敦盛。御身は一の谷に御座有とは申せ共。御心はさながら都へのみそ通はれける。「カ、ルフシ」思召し出されたる時に。「同」作られけるよと。おほしくて四季の。帳をそかゝれたる。先(11ウ)

青陽の。朝には。垣根こつたふ鶯の。野辺になまめく忍ひ音や。やけいの霞。頭れて外面の。花もいか計。重さくらに八重桜。きうか三ふくの。夏の天にも成ぬれば。藤なみいとふか郭公。よの蚊遣火。下もえて忍ふる。恋の心する。光菊しらんの。秋にも成ぬれば。尾上の鹿。立田の紅葉。枕にすたく。きりくす。きかてや萩の咲ぬらん。けんとうせつ。冬の暮にも。成ぬれば。谷の小河も通路も皆白妙に。四方なると。いへ共。消て跡もなし。名残おしき故郷の(12才)木々の梢を見捨つ。今は又一の谷の。苔地の下に埋もる。恒盛の末の子の。無官の太輔。敦盛とかき。とめてそ。をかれたる。「コトハ」是を見かれをみるに(たてまつるに)いと涙はせきあへす。泪をとめ御死骸をは。郎等に預けをき。御首笛巻物ともに持せ。大将の(へ)御前に参り此由かくと申上る。判官御覽あつて。荒ふしきや此笛は。なにかしか見知る所の候そ。是は一とせ高倉の宮。御むほんくわたて給ひし時。天下にこ枝せみおれとて二くわんの笛あり。蟬おれをは三井寺(12ウ)にてみるくに多かふし給へり。小枝をは御最後迄持せ給ひしか。みなせ光明山にして。討れさせ給ひしとき。此ふる平家の手に渡る。一門

の御(其)中に笛の器用を召るゝに。若官なれ共敦盛。きよようの人と
 多らまれ(なりとて)下されけると承る。「サシイロ」けさ一の谷の
 内裏役所に。笛の遠音の聞えしは。此人の吹けるかとて。太将泪をな
 かし給へ(ひけれ)は。しるも知らぬもおしなへて。皆涙をそなかさ
 れける。「コトハ」判官涙をとめさせ給ひ。敦盛は名太将。熊谷い
 しくも仕たり。此度のけじやうには。武蔵(13才)

の国長井の庄をあておこなふ(そ)。急て罷下れ。熊谷か郎等共。所
 知入せんと悦ふ処に熊谷。「イロ」御返事に及はすして涙の隙よりも。
 かく計。「人となり。人とならはやとそ思ふ。さらすは終に。墨
 染の袖。「コトハ」か様に詠して御前を罷立。(なきさに下り)敦盛
 の御死骸を。見奉り。あらいやはしや。源氏雑兵の。駒のひつめの通
 ふ所に。何として情なく捨奉るへきそ。此御しかひを平家方へ。送り
 申てあればとて。よも罪科にはおこなはれし。送り申さはやと思ひ。
 塩屋の浦に下り。小船(13ウ)

一艘こしらへ。侍一人雑色二人相添。状を書認て八嶋の磯へそ送ける。
 扱も平家には。元暦元年二月七日に一の谷をおち。浦つたひ島つたひ
 して。十三日の早朝に八嶋の磯に着給ふ。熊谷か送りの舟もおなし日
 八島の磯につく。かたきみかたの事なれば。その相遙にろかひを留め。
 大音上て呼はる。只今源氏かたよりも。熊谷か私の使に罷向て候。門
 脇殿の御内なる。伊賀の平内左衛門とのへ。申へき子細(事)の候と
 たからかに呼はる。「サシクトキ」荒いたはしや平家方には一の谷
 (14才)

をおち。渡海はるく落延たれば。さふなふ源氏のせいのかゝるへ
 しとはしろし召れす。唯此程のまふきには。波枕棍枕。夢驚かす。松
 の。「フシ同」かせ命も。知らぬ松浦舟。こかれて物や思ふらん。心
 ほそくおほせしに。源氏の舟よと聞召し。われ先にくにと。ろかひ
 をはやめ落行共。東国の。源氏に。あはんと。いへる。平家なし
 「ツメ同」大臣殿御覽して。不覚なりかた。よはぎやう(げう)
 きに及んで。ときまつほうにきすといふ。たとへは異国の樊噲か。わ
 つたつてのつたりとも。あれ程の小船に(14ウ)

何ほどの事の有へきそ。たれかある行むかつて。きいて参れと有しか
 は。平内左衛門承はつて。存する道候。きいて参り候らはんと。屋形
 の内に。つと入て。いてたつ其日の装束は。花やかにこそ見えにけ
 れ。はだには白き帷子。皆しろおつて引ちかへかちんの鎧直垂の。四
 のくゝりを。ゆるくとよせ(させ)。楊梅桃梨の左右の小手。白且
 みかきのすねあて(に)。熊皮のみみたひ銀にてへりかね渡し。あく
 ち高にふんかうたり。獅子に牡丹のわいたてし。糸火威の鎧の。みの
 時とかやくを(15才)

。草摺長にさつくとき。ゆつて上帯ちやうとしめ。九寸五分の。鎧と
 をしをめての脇にさいたりけり。一尺八寸の打刀(を)。十文字にさ
 すまゝに。三尺八寸候らひし(ける)。赤銅作りの太刀はいてなし打
 烏帽子にはちまきし。白柄の長刀を杖につき。我におとらぬ郎等共を。
 七八人相くし。はし舟をろし打乗表に楯をしとませ。いやさんざめか
 いて押寄る樊噲かいきおいもかくやとおもひ知られてあり(たり)

〔コトハ〕送りの舟に押よせ。抑源氏かたよりも。熊谷か私の使とは何事の次第そや。をくりの(15ウ)

者申けるは。さん候別の子細にて候らはす。敦盛をくまかへか手にかけ申。余りの痛はしさにへくおもひ申によつて。色々の武具共。又は進上をそへ。是まで送り申て候へそ。急て御座舟へうつし御申候らへ。元国聞て。あらふしきや。あつもりは一門の御舟に召れ。阿波の鳴戸にましますと。承り及び候か若偽にてや候らん。送りの者申けるは。あふ御不審は理り。まこと偽りをはたゝ御らんせよと申す。実々是はいはれたりと。へ送りの舟に我か舟をしよせへ長刀を杖につきへいて。〔サシクトキ〕舟底をさしうつむいて見てあり(16オ)

ければ。実と色々の縫物したる直垂に。敦盛の御死骸とおほしきを押つゝみてそ。置にける。紫裳濃の御きせなか。金作りの御はかせ。十六さいたる染羽の矢。〔フシ同〕村重藤の。弓もありまかふ。所も。まします。元国余りのかなしさに。長刀をからりと捨。送りの舟に乗うつり。御死骸にいたき付。なけともさらに。涙なしさけへ共。声そ。出さりけり。やゝありて元国は。泪をなかし申やう。いたはしや此君の。一の谷を御出の時。此きせなかを奉る。おとなしやかに敦盛の。いつ(16ウ)

しか御一門。よか世にましへて。四海に風の。治りつゝ元国に所知せさせ。見るとたに思ひなは。いか計うれしかるへきと。仰られし其時のへは。元国かうれしさを何にたとへん。方そなき。まことの時

名古屋市立大学人文社会学部研究紀要 第二十号 二〇〇六年三月

にはとうてんし。召れさる敦盛をへ。一門の。御舟に召れつゝ。阿波の鳴戸にましますと。申たる。元国か心の内の。不覚さよ。今一度元国かと。仰出され候らへとて。消入やうに鳴ければ。送りの。者も供人も。実理りや。道理とて皆。泪をそ。なかしける。〔コトハ〕送りの者申けるは。是は御使の身にて(17オ)

候ほとに。急て御さ舟へ移し御申候らへ。元国聞て。実々思ひに忘し思ひ忘れて候とて。敦盛の御死骸を我か舟に移し申。大船に押よせ此由かくと申上る。門脇殿も恒盛も。何敦盛か討れたると云か。さん候と申すへければ。〔サシクトキ〕あらむさんや敦盛は一門の舟にのり。阿波のなるとにある由を。風の便に聞し時は。いか計嬉しかりつるに。熊谷か手に懸り。〔フシ同〕扱は討れて。有けるかと涙。なからに出給ふ。女房たちにとりては。女院を始。奉り。むねとの女官。百六拾人(17ウ)

もはかまの。そはを取。皆舟はたに立出て。御死骸にいたき付。是は夢かうつゝかと。一度にわつとさけはれしを。ものに能々とふれば。是や此積尊の。御入滅の二月や。十代御弟子。十六羅かん五十二類に至るまで。別の道の。御なげきかく。やと思ひ。知られたり。〔クトキ〕やゝ有てちゝ恒盛はおつる涙の隙よりも。あらむさんや敦盛へが。一の谷を出し時故郷のかたを見送り。心ほそけにて立たりしをいさめはやと思ひ。不覚なりとよ敦盛よ。〔クリ〕三代槐門の。家を離れ。骸を野山(18オ)

にうつみ。名をはんでんの。雲井に。上へき身か。〔クトキ〕郎従か

七

見るめをも恥よかしと云てあれは。さあらぬていにて渚迄下りしか。

笛を忘れて候とて。取に帰りし其時ともに帰らんとは思ひつれとも。

敵みかたにおしへたてられ。又二目とも見さりしなり。「フシ同」情

有熊谷にて。形見是まで送たり。むなしき死骸かた見。けふはみ

つ。あすより後の。悲しさをたれに。語てなくさまんなふ。人々と宣

ひつゝ。もたへこかれ給ひけり。平家方の。人々は今。一入の泪なり

〔コトハ〕其後熊谷(18ウ)

か送りの(たる)状を召出す。門脇殿は御覽して。大将なれば此状を

もし義経ばし送りけるか。使は是非を弁すた、門脇殿へと申す。とて

も伊賀の平内左衛門(へ)と書たる状にてある間。家長御文仕れ

〔カ、ルイロ〕承候とて。舟のせかひにひさまつき。状を給はり指上

〔て〕たからかにこそ誦たりけれ。〔ヨミモノ同〕直実謹而申不慮に。

此君と参会し奉つし間直に勝負を。決せんと欲(ル)刻俄に。怨敵の

思ひを亡し還而武芸の。いさみきえ。剰は守護を加。奉る処に多勢。

一同に(19オ)

きおいかゝつて。東西に是はゐる。かれは大勢。是は無勢焚喰還而。

長良か芸をつゝしむたま。直実は生を弓馬の家にむまれ謀を。洛

西にめくらし命を。同ずちんとうかゆふへ世々万々にをよんで。自他

家(くわ)かの。面目をほとこせり扱も此度悲哉(や)此君と直実ふ

かく。逆縁を結び。奉る処に歎哉(ナゲカシキカナ)つたなきかな。

此悪縁を。翻す物ならば長く生死の鎖をはなれ。一蓮の縁とならんや

閑居の地所を。しめしつゝ御菩提を。懇に訪ひ申へき事真偽後聞(19

ウ)

。かくれなく候此おもむきをもつて。御一もんの。御中へ御披露ある

へく候仍恐惶謹言元暦元年二月七日。武蔵の国の住人。熊谷の次郎直

実進上門脇殿の御内なる。伊賀の平内。左衛門尉とのへと誦たりけり

〔サシイロ(コトハ)〕御一もん雲客けいしやう同音にあつとかん

し給ひ。けにやくまかへは。遠国にてはあばう羅せつ。ゑひすなん

とつたへしか。情は。ふかかりけるそや。〔コトハ〕文章の達者さ

よ。ひつせいのいつくしさよ。かほとやさしきものに返状なくて(20

オ)

はかなはし(ふましい)と。大臣殿の返状を。つねもりの自筆にあそ

ばしてたふ。をくりのものたまはり。いそき一のたにへ漕もとりくま

かへとのに見せたてまつる。くまかへ。ゆみ矢のみやうかなくして。

いかにとしてつねもりの自(御)筆をおかみ申さんと。三度いたゝき

ひらいて拝見申すその御書にいわく。〔カ、ルヨミモノ〕敦盛か死骸

并に遺物たまはり畢ぬ。此たひ花洛をうつたつしよりこのかたなんぞ。

二たひおもひかへす事のあらんや。さかんなるものゝおとろふるは無

常の(20ウ)

ならひ。あへるものにわかるゝはえどの習ひ。釈尊羅睺羅殿の一子の

わかれにあらすや。いはんや凡夫をや。去る七日にうつたつしより此

かた燕。きたつてかたらへともそのすかたを見す。帰鴈翅をつらね空

にをとつれとをるといへど。そのこゑをきかす。されはこのゆいせき

のきかまほしきによつて。〔同〕天にあふき地にふしこれをいのる。

神明の納受仏陀の。かななふを。待ところによつて。七日かうちに。

これを見る内には。信心をいたし外にはかんるい(21才)

袖をひたすによつてむまれ。きたれるにあへり。喜悅のはうい。なくしてはいかゝ其すかたを二度見ん。すみ頗須弥のいたゝき。ひきうして蒼海還而あさしすゝんてこれを。はうせんとすれはくわこをんくたりしんそき。こたへんとすれはみらひ永々(やうく)。たるものか万端おほしといへとも筆紙に。盡しかたし(フシ同)これはむさしの。くまかへの返し。状とそ誦たりける(クセ)さるほとに熊谷は。よくく見てあればぼだひのしんそおこりける。今月十六日(21ウ)

に。讃岐の八嶋をせめらるへしときいてあり。我も人も。うき世になからへてかゝる物うきめにも又。直実やあはんすらめ。おもへはこの世は常のすみかにあらず。草葉にをくしら露。水にやとる。月より猶あやし。きんこくに花をえいし。栄果はさきたつて無常の風にさそはるゝ。なんらうの月を。もてあそふともからも。月にさきたつ(へち)て有為の雲にかくれり。人間五十年げてんのうちをくらふれば。夢まほろしのことくなり(片ツメ同)一度をしやうをうけ(22才)滅せぬものゝあるへきか。これをほたひのたねと。おもひきためさあらんは口惜かりし次第そと。思ひきため。いそきみやこへのほりつゝ。敦盛の御くひを。見ればものうさにごくもんよりぬすみとり。我が宿にかへり。御僧を供養し。無常のけふりとなし申御骨をとりくびにかけ。昨日までも今日迄も人によわけを見えしと。ちからをそへしし

名古屋市立大学人文社会学部研究紀要 第二十号 二〇〇六年三月

らまゆみ。今は何にかせんとてみつにきりおり三本の。そとはとさため浄土のはしにわたし。宿を出てひかし山(22ウ)

。くろ谷にすみ給ふ。法念上人を師上に頼奉りもつといきり西へなけ。その名を引かへ。蓮生坊と申いや花のたもとをすみ染のとうちの里のすみころも今きて見るそよしなき。かくなる事もたれゆへ。風にはもろき露の身と(フシ同)きえにし人の。為なればうらみとはさらに。おもはず(コトハ)黒谷に籠居し念仏申てあたりしか。あるとき蓮生ころのうちにおもふやう。紀の国におたちある。高野山をおかみ申さはやと思ひ。上人に御いとまを申。づた(23才)

のふちおい肩にかけ。たのむものには竹の杖。黒谷をまたよをこめて立出る。みやこ出の名所に。東をなかむれば。清岸寺今熊野。清水八坂長楽寺。かの清水と申は。嵯峨の帝の御願所。すみどもの造建田村丸の御建立(サシイロ)大同二年にたてられ。よろつのほとけの願よりも。千手のちかひはたのも。しや敦盛の正靈頓證菩提とえかふして(コトハ)にしをなかむれば丹波においの山(カ、ルモンタ)イ)おりくちは。たにのたうみねの堂(北をかへつて(23ウ)見をくれは)内野を出て蓮台野(ふな岡山)の(墓しるへし(フシ同)見るになみたも。せきあへす。みなみをなかむれば。東寺西寺四塚。としはゆけとも。老もせぬ。むつたかはらと。打なかめ。山さきたからてら。せきとのみんを打すき。八幡の山を。下かうして雅高の御子のみかりせし。片野の原をとをり。禁野の雉子は。子をおもふうとのに。しけき籬垣の。宿を過れはいとたの原。くほつの王子

を。ふしおかみ天王寺へそまいりける。「片ツメ」天わうじ(24才)と申は。聖徳太子の御くわんなり。七ふしきのありさまこうはふるともつきすまし亀井の水のながれたえぬそたつとかりけると。ふしおかみ候らひて。天野にまいらるゝ大明神と申は。高野の鎮守ておはします。御山に法師を。さつてたはせ給へと。ねんころにきせい申てはや高野山へそまいらるゝ。かたしけなくも。高野山と申は。帝城をさつて二百里。け(きや)うりをはなれむにんじやうはちようの嶺八の谷。がゝとして岸たかし。せいらんこすゑをなら(24ウ)せと夕日の影長閑なり。あふかの寺より。みえひたうのたに。胎藏戒の大目百八十尊を表せり。扱又大塔より。奥の院へ。これも大日の。三十七尊を表せり。こんだうの本尊阿闍保昌弥陀釈迦是また大師の御作なり。大塔と申は。なんてんの。てつとうをまなんて。都卒天の。はんりをかたとり十六丈のほうとうかみは千だいのあみた。中は千手の。二十八ふつしゆしもは薬師の十二神生々世々にきわなく。しゆしやうあくしゆのつみきえ。来迎の三尊を(25才)おかむそたつとかりけると。ふしおかみ候らひてはやおくのおんへそまいりける。「フシ同」道のほとりの。白骨はいさこをまくか。ことくなり。「片ツメ同」いよ／＼念仏申奥の院へまいり。敦盛の御骨をこめをき。蓮花谷のかたはらに智織院と申。庵室をむすんで(へび)。峯の花を手折。あふあかの水を結び。おこなひすまし蓮生。八十三と申に大往生をとけにけり。悪につよければ。善にもつよしよふ文武二道の名人かんかはしらす本朝にかゝるつわものあらしと(25ウ)

。かんせぬ人はなかりけり(26才)

【校異】

本曲の校異に使用した本は次のとおり。(毛)毛利家本、(直)直熊本、

(藤)藤井氏本

1才 ○此度―(毛)此般、(直)平家 ○はだよせのゆふなるに―

(直)はなよのよふなるに

1ウ ○御馬―(直)御馬の毛 ○御供め(申)され―(毛・藤)御

供申し、(直)御供めされ

2才 ○いや／＼かなふましいと―(毛・藤)叶ましひと ○駒の手

綱うつすゑて―(直)駒のかしらををつすえ

2ウ ○よき大将と―(直)大将と ○引かへし御勝負あれ―(他

本)ナシ ○(かたきにおきても能かたきそうそ)引かへし御勝

負あれ(候へ)―(他本)仇をきて能敵さふぞ引返し御勝負候

へ

5ウ ○ひんぬいて―(直)さつとぬき ○腰の刀をひんぬいて―

(直)ナシ

7才 ○なに(それ)かしかくび―(他本)それがしが首

7ウ ○いたはしさに―(直)いたわしさにさしうつむいて ○扱は

上らうは―(直)熊谷承り扱わ上臈は

8才 ○親と戦(あらしい)子と戦(たゝかい)―(他本)親とあら

そひ子と戦ひ ○ならさる(ぬ) — (他本) 今生ならぬ

8ウ ○我か子(なにかしかちやくし)の — (他本) なにがしが嫡子の ○むさんや直家 — (毛・直) 荒むさんや直家

9オ ○弓取か — (直) つはものか ○腹をきれ(り候へ) — (他本) 腹をきり候へ ○まことそと思ひ(なにかしかかたを又二目とも見ずし) — (毛・藤) 真ぞと思ひ(なにかしかかたを又二目とも見ずし、(直) まことそとこころえなにかしかかたをまたふためともみすし

9ウ ○いや(此君の御くびを) — (毛・直) 能々物をあんずるに此君の御首を ○なふいかに敦盛 — (毛) 如何に敦盛、(直) いかにそうろうあつもり

10オ ○武藏の熊谷と — (毛・直) 武藏の熊谷と云者と ○我子の(に) 直家に — (藤) 我が子に ○思ひか(なすらへ) — (毛) よそへ、(直) よそへ申、(藤) 思ひなぞらへ

11オ ○涙をと(め) — (毛) 泪をと(め) ○巻物とおほしきものあり(一巻候らひけり) — (他本) 巻物一巻候ひけり ○何成らんと見てあれば — (毛・直) 何成らんとおもひ開ひて見奉るに、(藤) 何成らんと思ひひらいて見奉れば ○くれ(とこそか)れ(あそはし) けれ — (毛) 暮々とこそあそはしたれ、(直) くれ(とあそはしたり、(藤) くれ(とこそあそはし) けれ ○給ひしか天下第一の美人たりしを — (直) たまいしを

11ウ ○一目見しより恋と成て — (直) みそめたまいしよりこのかた

12ウ ○みるに(たてまつるに) — (他本) 見奉るに ○大将の(に) 御前に — (他本) 大将に ○高倉の宮 — (毛) 高倉の院

13オ ○きようの人とゑらまれ(なりとて) — (他本) きようのじんなり(とて) ○承る — (毛・藤) 承るか、(直) きこえしか ○なかし給へ(ひけれ)は — (毛・直) なかし給へば、(藤) なかし給ひければ

13ウ ○(なきさに下り) 敦盛の — (毛・直) 渚にくだり敦盛の、(藤) あつもの

14オ ○こしらへ — (直) 用意し ○大音上て呼はる — (毛・直) ナシ ○申へ(き子細(事)の) — (他本) 申すべき事の

14ウ ○心ほそくおほせしに — (直) ナシ

15オ ○熊皮のもみたひ銀にて(へりかね渡しあくち高にふんかうたり) — (他本) ナシ

15ウ ○抑源氏かたよりも — (直) 只今源氏方よりも ○をくりの者申しけるは — (毛・直) ナシ

16オ ○余りの痛はしさに(くおもひ申によつて) — (毛・藤) 余いたはしくおもひ申すに依て、(直) あまりの(二) いたわしさに(そ) — (毛) しんじやうをそへて送り申て候、(直) 進上をそゑ贈り申て候、(藤) しんじやうをそへて送り申て候ぞ ○ましますと承り及ひて候か — (毛・直) まします由を風のたよりに承りて候か ○送りの者申けるはあふ — (他本) ナシ た、御らんせ

よと一(毛・直) 只船中を御覧つぜよと申す ○(送りの舟に我が舟ををしよせ)一(毛) をくりの舟に押寄、(直・藤) 贈りの舟にわが舟ををしよせ

17ウ ○さん候と申す(ければ)一(他本)さん候と申ければ

18ウ ○たれに語てなくさまん一(直) なにたよりてなくさまん

19オ ○送りの(たる) 状を一(他本) 贈たる状を

20ウ ○かなはし(ふましい)と一(他本)かなふまじひと ○をくりのものたまはり一(直) 使御返事を給り、(藤) つかひのもの

給り ○くまかへとのに見せたてまつる一(直) 熊谷にかくと申す

23オ ○あるとき蓮生ころのうちにおもふやう一(毛・直) 有時蓮性思ふやう ○づたのふちおい肩にかけ一(毛・直) ナシ

(鎌田)

源氏左馬の頭よし朝は。待賢門の夜軍にかけまかせ給ひ。東国さして落給ふ。爰にせんそくかかけにて。横川法師の太将に大屋の中記か放す矢を。新朝長の弓手の膝口にうけとめさせ給ひ。其御手大事にて。美濃国大はかの長者の館につかせ給ふ。長者急立出。義朝の御目にかかり。さて朝長は御供か。きかまほしやと有しかは。義朝きこしめし。大事の手負最後のきわと云ならは。長者の歎き深かるへしとおほし(1オ)

めし。さん候朝長をは。悪源太と打つれ。鎌倉へつかはして候。明年

の夏の比。必くして参るへしとふかくつゝませ給ひ。頓て鎌田を召れ。いかに正清。朝長か躰を見よ。尾張をさして一まづ。落へきにてもあるやらなくわしくとへ。正清承り。中宮の太輔新朝長に参り。明日は都より。討手の参り候へし。よはに紛れて一まづ。落へきにても御さあらは。御供召れ候らへかすと申せは「サシクトキ」朝長きこしめし御供申度は候らへ共。いたでうす手に七か所の手負。五(1ウ) 体やすからねは御供申かたし「コトハ」さあらは平家の者共に。かきくびなどにせられては。かばねの上の恥辱たるへし。只々腹を切なんと御返事を申させ給ひ。やかて鎌田を召れ。いかに正清。弓矢にたづさはり。きゝうの家と云ながら自害をいまたしらぬなり。いかやうにする物そ委申せ。正清承り。それ自害と申は。十方浄土とは申せ共。先最後の時は。西にむかつて手を合。高声に念仏申。腰の刀をすりとぬき。ゆん手のわきにかはとたて(2オ)

馬手へきりと引まはし。返す刀を取なをし。心もとにさし立。はかまのきゝわへおしおろし「カ、ルフシ」臍をつかんでくり出し「同」寸ずんにきりて。捨たるをきよき。自害と。申なり。朝長きこしめし。やかて心得給ひて。おし手おしおきなをり。腰の刀をするとぬき。弓手の脇にかはとたて。めてへ漸々引まはし。返す刀を取なをし。心もとに。さしたてゝ。きらん／＼とし給へとも。いたてうすてに腕こはり。御身がうごうならされは。自害を半に。しかけた(2ウ)

まひ鎌田は。なきかくびをとれ。正清このよし見参らせ。涙とともに。

参りつゝ御くびを。とらんとしけれ共。三代。さうおんの主君に。い
つくにかたなを立へきと。なくより外の事はなし。朝長は御らんして。
不覚なり正清。はやとく／＼との給へは。いたはしや御くびを。水も
たまらずかきおとし。義朝に参りつゝ御自害のよしを。申せは御落涙
は隙もなし〔コトハ〕其後義朝鎌田を召れ。是より長田か館へは何
としてかはつくへきそ。正清うけ給はり〔3才〕

。長者のおと／＼に。驚のすの玄光をめして御頼みあれと申す。さら
はめせとて。玄光を御前へめされ。万事たのむと仰ければ。やすき程
の御事とて。人々を舟にのせ申。こう津の七郎か七百余騎にてさへ
たる。関所の前を。とかくちんじておしとをし。うつみのうらに舟を
つけ。鎌田兵衛を御使にておさだをたのませ給ふ。長田なんなくたま
れ申。新造に御所をたて。きみをいれ申いつきかきしつき奉る。此事天
下にかくれなし。六はらにさし〔3ウ〕

かゝり内儀評定とり／＼なり。時刻うつしてかなふまし。いそぎ討手
を下さんとて。弥平兵衛宗清に三百余騎を下したふ。かゝりける処に。
小松の内府の仰には。をろかなる御はからひかな。かの東国と申は。
源氏に心あるかたなり。討手下ると風聞せは。あづまにのこる源氏か。
雲霞のことくはせあつまつて。如何様大事も出来なん。所詮たばかり
状をこしらへ。長田を頼ませ給ひ。過分の国所領を一たんあたへみか
たに召れ。義朝をたばかり。やす／＼と〔4才〕

討て後。長田も誅罰有へきに何の子細の候へき。此儀にしくはあらし
とて。頓てたばかり状をこしらへ。いそぎ飛脚を立。長田か館へそつ

け給ふ。長田御教書を頂き。ひらいて拝見申其御書にいわく〔イロ
ヨミモノ〕下す状源氏左馬の頭義朝は。おやのくびをきるのみならず。
したしむへき兄弟をほろぼし。六親不和にして三宝のかごなし。父母
ふかうにして天罰をかうふる。其いはれ相たかはす〔同〕去年のつ
み近年に感じ平治の。戦にかけまけていと〔4ウ〕

をさつて。遠嶋おんひにまよふ。わづかに露命を。石草にかけはせを
の次第を。らんふうにまかす。ほゞたのみすくなき事は槿花。一日の
影を。待かことしさうふう春の雨をまつにたり。とても自滅すへき
ものをや。此みかたにくみせん事は只深淵にのぞんで。薄氷をふむに。
にたるへしはや義朝か首を切て天下にさへけ。申へしけ状には。美濃
尾張三河。三ヶ国をあておこなふ。おなしく受領は望たるへし。仍状
件のことし。平治二年正月一日長田〔5才〕

かたちへと書れたり〔コトハ〕長田御教書を頂き。夜半に人をまは
し。五人の子共を近付。是々おかみ申せ。輪旨のむね至極の道理爰に
あり。実も此君は。親のくびを切給ふ五逆罪の人なるを。主に頼て何
かせん。いさ此君を討取て。美濃おはり三河。三か国を給はり。上見
ぬわしと思ふはいかゝはからふ。子共承はり。是はゆゝしき御大事に
て候。此人々三人をうたんに。尾張の国かゆるきてもたやすくうた
れ給ふましい。御思案あるへく候。長田聞て〔5ウ〕

。をろかなり汝等。せいをそろへてうたばこそ。たばかつて討へきに
何の子細の有へきそと申す。懸りける処に。三なんせんじやうと申者。
えほしのさきをちにつけ。仰のことく此君は。親の首を切給ふ五逆罪

の人也。さて又一代ならず二代ならず。三代さうおんの主のくびをきり給は。五逆さいをはさて置ぬ八逆罪をいかせん。永々敷は候らへ共。爰にたとへの候をかたつてきかせ申へし。むかし天竺雪仙のかたはらに。めいみやうちやうと云鳥あり。かの鳥。胴一つにてはし二つ。一つのはしか餌(6才)

をもとめ。ぶくせんとせし時。一つのはしかしこくし。此急をちうにてばうてくう。一つのはし思ふやう。いかなればよの鳥は。胴も一つ箸も一つ。我等はいか成因果にや。胴ひとつにてはし二つ。たまもとむるえしきをも。うばはるゝ事の口惜さよ。所詮一つのはしを退治せはやと思ひ。毒の虫をもとめ。服するまねをしけるに。常のこく心得。此急をちうにてばうてくう。「カ、ルモンタイ」はしはふたつと申せ共。胴か一つで。有間。「フシ同」其毒胴に。納りて。

身軀か破れつゝ。胴軀か損して。をの(6ウ)

れさへに。死たるとうけたまはりて候そ。我も人も自然は。もつてはひとしかるへし。此君と申は。政道かしこくおはします。鎌田兵衛正清は。双ひもなき剛のもの。わらはに洪屋の金わうは。弓矢を取て。

名仁と名を得たる程の者なり。是三人をうたんには。尾張八郡。うこいてもたやすく討れ。給ふまし。「ツメ」我々か心中には。とても捨る命ならば君に頼まれたてまつり。うつみに城をこしらへ。かたきむかふと見るならば。軍兵ともをさしつかはして目さまし軍せさせ。軍兵つき(7才)

は腹きつて。死出の山の御供こそ。弓矢をとつての面目なれ。昔か今

に至るまで。智と主とを打取て。世に出たる法はなし然るへくは此事をたゝ思ひとゝまり給へとよ。「コトハ」長田聞て。殊の外に腹をたて。何と申そあのくわじやめ。それ天地ひらけ始しより此かた。天は父地は母。ぶぼのおんをかうふり。庄司か申事を直にそむくはきつくわひなり。惣してあのせんぢやうめを。見れば中く腹もたつ。罷立といふまゝに。ゐたる所をづんと立(7ウ)

簾中ふかく入たるはとかう申に及はれす。「サシクトキ」あらむさんやせんぢやうはちゝにしかられ。常のところに立入つくゝ案しけるやうは。親のめいを背かして。主に弓矢を引ならば八逆罪の科。主と一所になり申。父に弓矢を引ならば五逆罪の科。しかしたゝ鬢をきつてさまをかへ。うき世をいとははやと思ひ。歳十七と申には。「フシ同」みどりの。たぶさをおし切て。刀と。ともに西へなげ。づだのふちおいかたにかけ。心と衣を墨に染。遁世修行に。出たりし(8才)

かのせんぢやうを。見し人のほめぬ。人こそ。なかりけれ。「コトハ」其後長田。残る子ともをちか付。実にせんぢやうめは遁世したるとな。さて汝等はせんぢやうに同すへきか父か。儀に随ふへきかとく返事を申せ。子共承り。ともかくも御はからひのあしくはよも候らはしと申す。長田聞て打わらひ。あふ。か様に申も汝等を。世にあらせんか為なり。先。智の鎌田をは。せんぢやうがでいへしやうじ。山海の珍物取かへく酒をしいよ。酔たらん所を見て。酌に立たる者か。持たる酒(8ウ)

をなげかけ。おしならへてむすどくめ。一間所によきつわものをかくしをき。折逢て討へし。わらはのこんわうをは。内海の沖に大綱をおろし。あみの奉行に事よせ。うつみにて討へし。主の義朝をは此庄司めに任せよ。先こんわうをたばかつてと云まゝに。しとみのもとのおりとらせ。わかき女を使にて金王をしやうずる。洪やさうなくきたる。長田いそき立出。さかづき三献とをつてのち。なふいかに洪屋殿を。頼申へき子細の候か。たのまれ給はんならば申へし(9才)

。金王きいて。何をたのませ給ふへきそ。長田の大事たるへくは一命をなりとも進すへし。長田きいて打笑。あふそれまでも候らはす。我が君是迄の御下向。一期の面目。優曇花と存知。蓬萊をからくみ。君を祝申さんため。ほうらいの下くみに。魚と鹿か入事にて候間。五人の子共をは。三河の国あすけの山へ鹿狩にこし候らひぬ。又うつみの沖に大あみをおろして候か。奉行にはつたと事をかいて候程に。わかきときのあそびに。れう(9ウ)

すなどりと申て。くるしからぬ事そとよ。奉行に立てたべかしと打とけ顔にぞたばかりける。「カ、ル」こんわう聞あへず。頓て腹こそたつたりけれ。たけなるかみを。からわにきつと上たるか。ふる／＼とひつといて。大わらはにそ成たりける。「イロ」爰にたとへありはんくわい勇をなせは。髪かふとのほちをおいぬく。是にはいかてまさるへき。いつもはなさす持たりし。四尺三寸の。角鏢のうちもの。「ツメ同」つばもと二三寸くつろけ。長田をはつたとにらんで。何とさうおさだ。君を大事に(10才)

思ひ申さはごふんなりともいづまじきか。さなくはりんたん隣郷の(へ)はうばい共も有こそするらめなと呼よせて出さぬそ。やうめいたいけんゆうはうもん。とまり／＼せき／＼にて。合戦に骨折。物の具にかた引せ。下りて三日も過さるに。あみの奉行に立とさうや。鳥の子か白なつて。駒に角のおいんほど。まちられよ庄司。定てかみへ申さるへし。太刀とり縄とり定て。汀て切て捨らるゝともまつたくこんわう出ましきそ。見れば中々腹も立。罷立(10ウ)

と云まゝに。ちやうしかはらけけちらかし。そとのでいまておどり出し。かのこんわうがいきおいはいかなるてんま疫神もおもてをむくへきやうはなし。「コトハ」去間長田はこんわうにおどされ。ふるひ／＼座敷を立て。かうのとの御前に参り。何とものをは申さすしてさめ／＼となく。義朝は御覽して。あれはいかに長田は何を歎ぞ。しやうじ承り。さん候それかし只今参事。別の子細にて候らはす。我が君是迄の御下向。一期の面目うどんげと存知。当世はやるほうらいを(11才)

からくみ。君を祝ひ申さん為。ほうらいの下くみに。魚と鹿か入事にて候程に。五人の子共をは。家の子郎等相添。三河の国あすけの山へ鹿かりに超候らひぬ。又内海の沖に大あみをおろして候か。奉行にはつたと事をかいて候程に。御内の洪屋を頼みて候らへは。奉行にこそはたゝさらめ。「クトキ」剩としよりたる庄司めを散々に悪口せられ申。つれなく命なからへ。是まで参りて候とてはら／＼となく。「コトハ」義朝きこし召れて。実々それはさそあるらん(11ウ)

。ぢたひあのこんわうは物くるはしき者にて。わがいふ事をさへ五度に三度はそむく。まして御ふんか申さん事をいかて承引すへきそや。よし／＼庄司腹みて帰れ。奉行には出さうずとて長田をかへさせ給ひ。頓てこんわうをめさる。洪屋うけたまはり。あは。庄司めか訴訟申たこさめ。ゆゝしき大事と心得御前に畏る。義朝御覧あつて。あらけなくはの給はて。やあ。何とて汝はちかふたるそ。都より此国迄。長田をたのみ下る身か。山ならば(12才)

須弥山。海ならば蒼海よりも猶たのもしう候に。一旦違ふ事ありとも。など承引はせさるへき。その上れうすなどりとやらんは。若き時のあそひにて。くるしからぬ事そとよ。奉行に立て魚を取庄司か心をなくさめよ金王承。さん候某。全奉行に出間敷にては候らはね共。長田か今のふる舞を見るに。君に心かはりを申。五人子共をは。かりくらにことよせ。さいそくまはしせいそろへ。君を討申さんするたくみを。めくらすと見て候を。御存知なくてか様に(12ウ)

君は仰候よなふ。義朝は聞召。よしそれとても力なし。長田か心かはるならば。一所に有ても何かせん。もしも注進たるへくは。後のうらみをいかへせん。只々出て魚をとり庄司か心をなくさめよ。「クトキ」金王承り。あかぬは君の御錠とて。お請を申て御前を罷立か。君も。きこしめせとたからかに。「フシ同」人は運命。尽ぬれは。ちゑの鏡も。かき曇才覚の花もちりはつる。郎等か。たはかるを御存知なきぞ。口おしき。「コトハ」かやうにかきくとき。一間所へつと入。はたには(13才)

唐紅ひつちかへ。重目結の直垂の。上下四つのくゝりを。ゆる／＼とよせさせ。黒糸威の大鎧。草摺長にぎつととき。上帯ゆつてちやうとしめ。惣而刀は三腰さす。四尺三寸の角つばのうち物。三尺五寸の太刀を重ばきにはき。四尺八寸の長刀を引杖につき。こうのとのゝ御前に参り。「サシクトキ」とうたいぜんこの夕けふりきのふものほりけふもたつ。ほくばうてうろのあたしみ。をくれさきたつよのならひ。もし内海にてうたれすは。「フシ同」参りて御目に。懸らんと涙とともに(13ウ)

。立出る。義朝は。御らんして。いまはしゝこんわう。門出祝へとの給ひて。自酒をそ下されける。お暇申て金わうは。うつみの沖へ出にけり。契りはあれと。山鳥の尾を。へたつるか。ことくなり。「コトハ」去間うつみには。兼てよりも金王に組手の人数を定むる。先一番に岸の岡の十郎。のくみおくりを先として。むねとの大力卅六人。大船八そうもよほし。上にあゆみの板をしき。沖をさして漕出。爰にも魚かなきそ。かしこにも魚かなきかと。爰かしこと目を見合て(14才)

こんわうをうたんとする。洪屋もとより存の事。ちつともさはく気色もなく。持たりし長刀にて。舟底をとう／＼とつきならして。何とて面々は。夕日にしにかたふき給ふに。縄手をはとらすして。やゝともすれは某に。めをかくるこそふしきなれ。あふ。やかて心得たり。汝等かしうの長田。君に心かはりを申。なにかしをは此沖にて。うたんするたくみを。めくらすと覺たり。「イロ」実や思ひ内にあれば色外

にあらはるゝ。天しる地しる。我しる人しるまぢかくよつてかなふまし
し (14ウ)

〔ツメ同〕先。長刀の切手には。こむ手なくてひらく手。八方さひし
き長刀の。手をつかふ物ならば算をみたして討るへし。長刀おれくた
けは。二ふりの太刀をもつて。散々に切へし。太刀のつかおれくたけ
は。三腰の刀を。ぬきかへく。とつて引よせさしころして。底のみ
くつとなすへきなり。運命尽はてゝ。太刀も刀もおれくたけは。汝等
かたふさをとつて。五人も十人も。左右の脇にかいこうて。海底につ
つと入。五日も十日も。底にて日を送るならば汝等か命はとまると
し。まぢかく (15才)

よつて叶ふましいとともへをかけりまはれは。うつみを出し時には。
金王ならば我くまん。誰くまんとはいさみしかと。此いきおいに恐れ
つゝ。舟底せかいにひれ伏てふるひわなゝきあたりけるは事おかしう
こそ見えにけれ。〔コトハ〕是はうつみの物語。爰に物の哀をとゝめ
しは鎌田兵衛正清なり。宵まては御前に祇候申。さよ更かたに御暇給
はり。らうの屋に帰り。みだいしみだ若とて二人の若の有けるを。弓
手めての膝にをき。〔サシクトキ〕をくれの髪をかきなて涙をなかし
(15ウ)

申けるは。正清都にて度々の合戦に。すゝろに命のおしかりつるも。
只汝等かある故なり。いつか汝等成仁し。父か供を仕り。恥ある矢を
も一筋射る。其折からを見るならば。いかゝはうれしかるへきと
〔フシ同〕明暮これを。願ひしに。思ひの外に引かへて。君落人とな

り給へは。御供申て正清も。うたれん事は。治定なり。さあらん時に
汝等は。三河の国新福寺の。院主の御坊にふかく。契約申なり。いん
じゆの御坊に参りつゝ。小経の一卷をも。よきに学して正清か。なか
らん跡をとへや (16才)

とて。つゝむにあまる。其涙よ所の。袂も。ぬれぬへし。〔コトハ〕
らうのおかたは御らんして。是はいまた正月の三日も過ぎるに。御身
は何をの給ふそと。いひもあへぬにしうとの長田。組手あまた用意し。
鎌田殿やまします。物申さんと云ければ。正清しうとの声ときゝ。是
に候とて太刀おつとり出んとする。らうのおかたは御らんして。袂を
とつてひつとゝめ。あはてたりかまだとの。さはいて見えさえ給ふ物
や。けふこのころのならひにて。親は子をたばかれは。子は又おやに
(16ウ)

たてをつく。しかも御身は落人にて。万に心を置へき身か。〔クト
キ〕あくましましき夜にてもなし。今夜をあかし給ひて。〔フシ同〕夜明
て御出。さふらへやかまた殿とそとゝめける。正清聞て。いつよりも
むつまじけなる風情にて。立かへり。打わらひなふさのみにとゝめ給
ひそよ。召るゝは御身の父正清か為に。しうとなり。ぬなから返事を
申さんは。不覺のいたりと存するなり。頓てかへらんさらはとて。名
残の袂を。引さげて長田と。つれてそ出にける。かりそめなから。別
とは後。にそおもひ (17才)

。しられたる。〔コトハ〕さる間せんぢやうがていへしやうじ。さん
かいの珍物国土の果子を調。色をかへては三度もり。ふせいをかへて

は五度七度。盃の数もかさなれば。さしもにたけき正清も。次第／＼にひらめいたり。長田是を見て。あわ時分はよひぞと思ひ。ちやうだいへつと入。かいをひとつ取出し。みぢんさつと打払ひ。につことわらつて申やう。なふいかに鎌田殿。此間の御つかれ。思ひやられていたはしう候。子共もあまた候。庄司もかくて候らへは。何かはくる(17ウ)

しう候へき。たゝ打とけて御あそひあれ。かいのみにとりては。山田の郷と申て。三百町の所の候を。鎌田とのに奉る。庄司も三度給はるなり。「ツメ同」御身も三度参れとて聲の鎌田に思ひさす。さる間正清舅のうたる盃に。所領をそへて得さするうへ。いつくに心のかかるへき。さし請／＼のむ程に。みぢんつもつて山となり。砂ちやうして岩となるさかつきの数も重なれば。弓手の座敷かめてへまはり。馬手の座しきか弓手へまはつて。天井も(の)大床か。ひらり(18才)くるりとまはりければ。うしろの障子によりそひてとろり／＼と眠けり。酌に立たる友柳。もつたる酒をなげかけ。おし双てむすどくむ。鎌田本より剛のもの。さつしたりと云まゝに。友柳かたぶさをとつて。ひぎの下にひつしいたり。長田是を見て。みたる所をづんと立て。鎌田かたぶさをとつてうしろへえいと折付る。かまた是を見て。さつしたり長田。左様にはせらるまいと。長田をかいつかんて。とつて引よせたりけれ共。いかゝはもつてのかすへき(18ウ)

。かくし置たる兵者か。透をあらせずおり相て一刀つゝと思へ共。十三刀さゝれて樊會といさむ正清もよは／＼となつてかつはとふす

「サシクトキ」あらむさんや正清の最後の詞そ哀なる。されは弓取の持ましきものは国をへたつる妻女なり。親のおこす謀叛を。なとかはしらてあるへきそ。たとひ縁こそつくるとも。二人の若かあるなれば。なと最後をはしらせぬそや。七の子はなすとも女に心ゆるすなど。申つたへて候。妻子珍宝及王位。臨終時不随者けに(19才)

も思へはかたき。なり。子は三界のくびかせとは。今こそ思ひしられたれ。三かひのくびかせと煩惱のきづなに引れつゝ。不覚の死をする物かな。「フシ同」南無阿弥陀仏と。是を最後の詞にて。朝の露と消にけり。正清の。最後の躰おしはかれて。あはれなり。「コトハ」さすかに長田もふひんとや思ひけん。夜明てくびをとらんとて。むなしきしかいにきぬ引おかいをの／＼なりをそしつめける。あらいたはしやらうのおかた。是をは夢にもしろしめさす。小夜更人もしつ(19ウ)

まり。兄弟の人々も。皆々帰らせ給ふか。ふしきや妻の正清は。何とてをそく帰らせ給ふらんと。うすきぬとつて髪にかけ。とうらうまはり。孫ひさしを通る時。人にしのふたるこゑにて。鎌田とのやまします。正清と呼けれど。宵に討れたる事なれば夜更て呼に音もせず。四間のていを見給へは。あぶら火すごくかきたて。あたりに人一人絹引かつきふして有。討れたるとは思ひもよらす。酔臥たるところ多。する／＼と寄て。なふいかに御身は。鎌田殿にてまし(20才)

ますか。左様に酔臥給ひては。自然我か君の御せんに。何としてたゝせ給ふへきそ。おきさせ給へと云まゝに。絹引のけて見てあれば

〔カ、ルフシ〕紅に身をそ染にける。余りの事のかなしさに 〔同〕

死骸にかはと。打かかりしはし。きえ入。給ひけり。少心を取なをし。さこそ最後に自を。恨させ給ひつらん。夢にも自しらぬなり。我をば誰に預けをき。捨てはいつくへ行やらん。我をもつて。行やとて。最後にぬかぬ。刀をぬきすてに自害と見えけるか。まてし (20ウ)

はし我心。明日にも成ならば。むさんや二人の若共か父母か。行ゑを知らずして。ちよ母よと呼ならば。邪見の祖父外舅ごにて。鶺鴒の餌を。打やうにうたせ。給はん。むさんさよ。同じ道にと。思ひきり。又らうの屋に立帰り。二人の若を見給へは。兄か手をは弟にかけ。弟か手をは。兄にかけよねんもなふて。臥にけり。らうのおかたは御覧して。二人の若をかきいたき。父正清の伏たりし。前後にとうとおろしをき。いかに二人の若共よ。祖父外舅ごのしわざ (21オ)

を見よ。なさけなの事やとて。りうていこかれなき給へは。二人の若も。もろともに。ふししつみてそなきにける。扱有へきにてあらされは。いかにきくか兄弟よ。かくうらめしきうき世に。なからへてあらんより。父もろともに打つて。焰魔のちやうにて。母をまてよとかたりつゝ。あにみたいしを引寄て。弓手の肘の。かゝりを二刀がいして。押ふる。おとくは是を見て。あらおそろしのはごせや。我をはゆるし給へとて。あたる所をづんど立。さらは余所へも。行かずしてころすへき (21ウ)

母にすかりつく。いと心はきゆれ共。眼をふさき思ひきり。心もとを一刀。あつと計を最後にて。兄弟の若共を。三刀に害しつゝ。我か

身ははだの守より。じゆへんの珠数を取出し。西にむかつて手を合。

いとたに。女は五章三従にえらはれて。罪のふかひとうけ給はる。弓箭にかゝる自を。たすけ給へや神仏。南無阿弥陀仏と最後にて。刀を口にくわへつゝ。かまたのしかひに打かゝり。あしたの露と消にけり。らうのおかたの。最後のてい哀といふも。あまりあり (22オ)

〔コトハ〕あらいたはしや母上。是をば夢にもしろしめさず。鎌田討れぬときこしめし。さこそらうのおかたかなけくらん。とふらははやとおほしめし。らうの屋に立より。よべどこたふるものはなし。扱はかまたうたれたる所にあるそとおほしめし。四まのいでいを見給へは。

らうのおかた二人の若。みなくあけにそみかへおなし枕にふしてあり。はよ此よしを御らんして。なふ是は夢かやうつゝかや 〔サシクトキ〕去ながら道理なりことはりや。何に命のおしからん。子よりも孫はいとを (22ウ)

しきに。花のやうなる若共をさきに立。よはひかたむくみつかからか。一人あとに残りなは。深山かくれの遅桜 〔フシ同〕木す多の。花はちりはて下えた

に一房。のこりて嵐を待に。にたるへし。われをもつて。行やとて。母も自害をとげ給ふ。平治二年正月の。二日の夜の事なるに。かまだを初。ふし五人水の。淡とそ。きえにける 〔コトハ〕天明ければ長田。鎌田かくびをとらんとて。四まのいでいを見てあれは。我か女房をさきとして。みなくあけ (23オ)

にそみかへおなし枕にふしてあり。さしもなさけなきおさたとは申せ

とも。心よはりはて。とんせいするかはらをきるか。いかゝはせんと
思ふか。いや〜。身より出せる罪なれば。たれをさしてかうらみん
と心の内にそんなすれは。あら果報なものともがなつたる有さまや。
おさたか世に出るならば。くわほうの妻女は。いかほともあるへし。
南無三宝阿弥陀仏と。へんしゆの念仏を申。鎌田かくひをとつたるは
とかふ申に及はれず。其後義朝の御前に(23ウ)

参り。今日は三ヶ日の御嘉例。八幡宮へ御社参あるへく候。たがみの
湯どのと申て。子細なきところの候らへは。御出有て御行水と申す。
義朝きこしめされて。けふ此比の落人を。先祖の郎等にてなくは。た
れか加様にふる舞へき。かまへて長田。ゆみ矢の冥加七代まであんお
んなれとの給ひて。やかて御重代の御劔。御腰物を。長田にあつげ給
ひしは御運のつくる所なり。かくて義朝はゆとのゝ内へいらせ給ふ。
宵よりさためし事なれば。都合二百余(24オ)

騎にて。湯殿をふたゑ三重におつとりまいてときをどつとあぐる。義
朝きこしめし。心かはりかおさだ。さん候都より。討手の参りて候に
御じかひあれと申す。よしともきこしめされて。長田か事はかねてよ
り思ひまふけたる事。あらなさけなしかまだ。たとひしうとゝ一所に
なり。われに心かはるとも。三代さうおんのしうになと最後をはしら
せぬそや。いかにゑいおさだ。刀まいらせよ。じかひをせんと仰けれ
は。承ると申て。刀に鎌田かくびを(24ウ)

そへ。ゆどのゝうちへまいらせ上る。義朝かまだかくびを。御ひざの
うへにかきのせ給ひて。「イロ」あらはかなのたゝ今のうらみことや。

我よりさきに立けるそや。「フシ同」死出の山にてまてよえい三途の
川て追つかん。「ツメ」こしの刀をするりとぬき。弓手のわきにかは
とたて。めてへきりゝと引まはし。返すかたなを取なをし。こゝろも
とにさしたて。はかまの着ぎわへおしおろし。腸をつかんでくり出し。
四方のかべになげ付。湯舟にて御手をすゝぎ西にむかつて手をあはせ
なに(25オ)

とて義朝しなれぬそ。さる事ありや父為義。天台山。月輪の御坊に。
ふかくしのひておはせしを。たはかり出し申て。御くびをきり申その
因果たちまちむくうて。しなれぬ事はくちおしゝ。いかにえい長田。
いそれまいつてくびをとれ。長田さうなく参りえず。長刀にてさし参
らせ。おづ〜御くびたまはり。「フシ同」智多の郡でうたれたまふ
たゝ人間の。みんくわはめくるにはやき。ものであり。「コトハ」さ
る間おさだは。義朝の御くびをもやす〜と(25ウ)

たまはり。今はこんわうがくびをおそしと相待る。さても金王は。う
つみの沖にありしか。例ならすむなさはきしきりなるは。何事かまし
ますらんと。こゝろの内に存ずれば。舟をよせよと下知をする。力を
よはぬ次第とてさうなく舟をおしよせければ。こんわうゆらりととつ
ており。いとま申てめん〜とて。五十丁の所なるを。もみにまふて
ぞはしりける。爰に鎌田かめしつかひし下女一人走りむかひ。なふ御
身はいつくへゆきてましますそ。かまだどのは(26オ)

ゆふへうたれさせ給ひぬ。君はたゝ今たかみのゆどのにて。御腹めさ
れさふらひぬ。今は御身のくびをおそしとまたせ給ふに。いづくへも

一まつしのはせ給へと申。こんわうきゝあへす。なみたをはら／＼と
 なかし。さはかり某か申つる事を御承引なくして。うたれさせ給ひた
 るや。さてはかままだは御心かはりをは申さゝりけるや。あふ尤かうこ
 そ有へけれ。さためて長田は。我か館にはよもあらし。きみの御最後
 どころ。田上の湯殿にあるへし。なにかしか(26ウ)

うたれん事は一ちやうとおもひ。打とけたらん所へつと行。長田
 かくびを打おとし。きみの御教養にほうぜんと。こゝろの内に存ずれ
 は。〔ツメ同〕たかみのゆとのを心かけてゆらり／＼とあかりけり。

おさだ是をみて。すはやこんわうか。うつみにて打もらされ。これま
 てきたつたるは。あますなもらすなとて。まん中にとりこむる。こん
 わう是を見て。面白し長田。そなたはばうぜいなり。われはたゝ一人。
 参りさうといふまゝに。大せいの中へわつて入。さん／＼に(27オ)

きつたりけり。さる間おさた。かなふへきやうあらされは。わがたち
 をさいて。もみにもうてそにけにける。こんわう是を見て。いつくま
 てといふまゝに。おさたを目にかけてはしりけり。去間おさだ。我か
 館へつと入。堀のはしを引て四方のきどをちやうどうつ。こんわう
 是を見て。あらもの／＼しけらのたけりといふまゝに。三重のほりを
 は。ひらり／＼とはねこえ。八尺築地のありけるに。手をかくるこそ
 をそかりけれ。かけずゆらりとほねこえ。中門(27ウ)

めんらうとをさふらひ。おさたをおふてはしりしは。あら鷹かとやを
 くゝつて。きじをおうがことくなり。さる間おさた。妻戸よりもつと
 とぬけ。行方知らすなりにけり。こんわう是を見て。ちから及はぬ次

名古屋市立大学人文社会学部研究紀要 第二十号 二〇〇六年三月

第とて又とつて返して。大せいの中へわつて入。にしひかし。北南く
 もてかくなわ十文字やつはなかたと云ものに。さん／＼にきつたりけ
 り。手本にすゝむつわものを。五十三騎きりふせ。大せいに手をおふ
 せ東西へはつとおつちらし。海のわたりをさうなくし(28オ)
 みやこをさいて上りけり。今王か心中をは。貴賤上下おしなへ。かん
 せぬ人はなかりけり(28ウ)

【校異】

本曲の校異に使用した諸本は次のとおり。(内)内閣文庫本、(毛)毛
 利家本、(打)打波本、(藤)藤井氏本、(京)京都大学蔵一本、(慶)
 慶応大学蔵伝小八郎本

1オ ○長者の館に―(毛)長者に ○御供か―(京・慶)御供にて
 はましまさぬか

1ウ ○必くして参るへしとふかくつゝませ給ひ―(京・慶)ぐして

まいり候はんと御返事を申させ給ひ ○頓て―(内・毛・打)其

後 ○躰を見よ―(内)手を見よ ○尾張をさして―(京・慶)

夜半にまきれて ○落へきにても御さあらは御供召れ候らへかし

と申せは―(内)御供めされ候へと申す、(毛・打)おつへきに

てもましまさは御伴召れ候へと申す、(京・慶)おつへきにても

御さあらは御供候へと申せは

2ウ ○返す刀を取なをし―(内)ナシ

- 3オ ○御くびを―(京・慶) 御刀を給御くびを ○其後―(京・慶) かくてちやうじやのおとく／＼にわしのをのけんくわうが ○長田か館へは―(内・毛・打) 尾張へは
- 3ウ ○めして御頼みあれと申すさらはめせとて玄光を御前へめされ 万事たのむと仰ければ―(内・毛・打) おたのみあれと申やかて わしの尾たのませたまへは ○人々を舟にのせ申―(内・毛・打・京・慶) 柴舟くたすにことよせ人々を(毛・打「舟に」アリ) のせ申かせをたかくゆひあけ上に柴をつみかけ ○こう津の七郎 か七百余騎にてさへたる―(藤) ナシ ○天下にかくれなし―(内・毛・打) 都にかくれなし ○六はらにさしかり内儀評定 とり／＼なり―(内・打) ナシ、(毛) 六原にさしあつまつて内 義評定とり／＼なし、(藤) 六はらにさしあつまらないぎひやう ちやうとり／＼なり、(京・慶) 六はらにさしあつまつて御ひやう うではとり／＼也
- 4オ ○いそぎ討手を下さんとて―(京・慶) やがてうつ手をくださ んとて ○かゝりける処に小松の内府の仰には―(内・毛・打) 小松の内府御錠には、(京・慶) 小松の内府の仰には ○たばかり状をこしらへ―(京・慶) ナシ ○みかたに召れ―(京・慶) ナシ
- 4ウ ○頓てたばかり状を―(京・慶) やがてぶりやく状を(京は「ぶりやく」ヲミセケチ「たばかり」トスル) ○いそぎ飛脚を 立長田か館へそつけ給ふ―(内) 長田か館へつけさせたまふ、
- (毛) 長田か館へ着給ふ ○長田御教書を頂き―(内・毛・打) 長田なんなくたのまれ申御教書を戴き
- 5ウ ○輪旨のむね―(京・慶) ナシ ○何かせん―(京・慶) 悪かりなん ○美濃おはり三河―(京・慶) 大国 ○ゆるきても―(内・毛・打・藤) うこきても、(京・慶) 訛ても
- 6オ ○をろかなり汝等―(内・毛・打) ふかくなりなんぢら、(京・慶) ふかく ○永々敷は候らへ共―(京・慶) ナシ
- 6ウ ○所詮一つのはしを―(内・毛・打) 所詮一方を、(京・慶) ナシ ○常のことく心得―(京・慶) ひとつのはし常のことく
- 7オ ○君に頼まれたてまつり―(京・慶) 君と一所に成申
- 7ウ ○天は父地は母―(京・慶) ナシ ○きつくわひなり―(京・慶) ひろう也
- 8ウ ○其後長田―(京・慶) 天明ければおさ田 ○父か儀に随ふへきか―(内) ナシ ○とく返事を申せ―(内・毛・打・京・慶) 早々返事を申せ、(藤) さう／＼返事を申せ
- 9オ ○おしならへて―(内・毛・打) ひらまんところを、(京) ひるまん所を ○折逢て―(京・慶) すきをあらせすおりあふて ○さかづき三献とをつてのち―(内・毛・京・慶) 三こん盃すきて後、(打) 三献さけ過てのち ○渋谷殿を頼申へき子細―(毛) 渋谷殿を万事頼み申へき事、(京・慶) 渋谷殿を万事憑申度事
- 9ウ ○何をたのませ給ふへきそ―(内・毛・藤・京・慶) 何事を仰

- 候へき、(打) 何事を仰候そや ○長田きいて打笑―(京・慶)
 ナシ ○蓬萊をからくみ―(京・慶) 当世はやる蓬萊をからくみ
 ○わかきときのあそびにれうすなどりと申てくるしからぬ事そ
 とよ―(京・慶) ナシ
- 10才 ○事そとよ―(内・毛・打) 事なれば ○からわにきつと上た
 るか―(内) ナシ ○ひつといて―(内・毛・打) ほとひて、
 (京・慶) ほとけて ○是にはいかてまさるへき―(内) ナシ
- 11才 ○しやうじ承りさん候それかし只今参事―(内・毛・打・京・
 慶) さん候 ○別の子細にて候らはす―(京・慶) ナシ
- 11ウ ○ほうらいの下くみに魚と鹿か入事にて候程に―(京・慶) ナ
 シ ○五人の子共をは家の子郎等相添―(京・慶) 子共をは
- 12才 ○奉行には出さうずとて―(内・毛・打) 奉行には出さうする
 にてあるそとて、(京・慶) すかしていたさふするにてあるそと
 て
- 12ウ ○奉行に立て魚を取庄司か心をなくさめよ―(京・慶) ナシ
 ○金王承―(内・毛) こんわう承りつゝしんで申けるは、(打)
 こんわうこんわううけたまはり謹而申けるは ○五人子共をは―
 (京・慶) ナシ ○さいそくまはし―(京・慶) 着到付 ○御存
 知なくてか様に君は仰候よなふ―(内) 御存なきこそおろかなれ
 (京・慶) 御存なくて君はさやうに仰られ候よなふ
- 13才 ○はたには唐紅ひつちかへ―(打) ナシ
- 13ウ ○黒糸威の大鑑―(京・慶) 黒糸おとしのおほよろひわたかみ
- 14才 ○兼てよりも金王に―(毛) ナシ、(打) こんわうに ○卅六
 人―(京・慶) 三十六人くみ手とし ○あゆみの板をしき―(内
 ・毛・打・京・慶) あゆみのいたをわたしこんわうをのせ、
 (藤) あゆみのいたをわたし ○爰かしこと―(毛・京・慶) か
 なたこなたと
- 14ウ ○ふしきなれ―(内・毛・打・京・慶) ふしんなれ ○なにか
 しをは此沖にて―(京・慶) 金王をたばかつて
- 15ウ ○祇候申さよ更かたに―(毛・打) 伺公申しみや使ひまいらせ
 小夜更方に
- 16ウ ○組手あまた用意し―(京・慶) ナシ
- 17才 ○不覚のいたり―(京・慶) びろうのいたり
- 17ウ ○さんかいの珍物国土の果子を調―(京・慶) ナシ ○たけき
 正清も―(内・毛・打) かうまる正清も ○子共もあまた候庄司
 もかくて候らへは―(京・慶) 長田かくて候子共も数多候へは
- 18ウ ○さつしたりと云まゝに―(京・慶) 心得たりと云儘に ○さ
 つしたり長田―(内・毛・打) なさけなし長田
- 19才 ○七の子はなすとも女に心ゆるすなと申つたへて候―(京・
 慶) ナシ
- 19ウ ○おしはかられてあはれなり―(京・慶) 哀といふも余あり

- さすかに長田もふひんとや……なりをそしつめける―(京・慶) ナシ ○くびをとらんとて―(藤) とらんとて
- 20才 ○をそく帰らせ給ふらんと―(内・毛・打) おそく見えさせ給ふらんと、(京・慶) おそく帰らせ給ふらんふしきさよとおもひ
- 孫ひさしを通る時―(京・慶) ナシ ○夜更て呼に音もせず―(京・慶) あかつきよへと音もせず ○あぶら火すぐくかきたて―(毛) 灯火かきたて ○酔臥たるところゑ―(内・毛・打) 酔臥たるそと思ひ
- 20ウ ○打かかり―(京・慶) たほれふし
- 21才 ○いかに二人の若共よ―(京・慶) ナシ
- 21ウ ○焰魔のちやうにて母をまでよとかたりつゝ―(京・慶) ゑんまのちやうにまいれとて ○ゆるし給へとて―(京・慶) たすけ給へとて
- 22才 ○南無阿弥陀仏と最後にて―(京・慶) なむあみた仏ともろとも
- 22ウ ○あけにそみ―(京・慶) ナシ
- 23ウ ○我が女房をさきとして―(京・慶) ナシ ○あけにそみかへし―(京・慶) ナシ ○たれをさしてかうらみんと心の内にそんなれは―(打) 誰をさしてかうらみん
- 24才 ○けふ此比の落人を―(内・毛・打) ナシ ○御腰物を―(京・慶) ナシ ○宵よりさためし事なれは―(京・慶) ナシ
- 24ウ ○かねてより思ひまうけたる事―(京・慶) さておきぬ ○と

- 仰ければ―(毛) ナシ
- 25才 ○こしの刀を―(京・慶) 御刀を
- 25ウ ○さる間おさだは義朝の御くびをもやすくとたまはり今はこんわうがくびをおそしと相待る―(京・慶) ナシ
- 26才 ○こゝろの内に―(内・毛・打・京・慶) 心もとなく ○いとま申てめんくとて―(京・慶) いとま申て面々また社繞逢へくれと
- 27才 ○たかみのゆとのを―(毛) 田上の、(打・藤・京・慶) たかみの城を ○面白し長田―(京・慶) ナシ
- 28才 ○こんわう是を見て―(京・慶) 金王おほきにはらをたて
- (わた)
- 相模の国の住人和田のよし盛。一門九十三騎を引ぐし。山下宿河原。長者の宿所にうちより。夜日三日のさかもりは面白ふこそきこえけれ。長者も兼て相かまへたる事なれは。かうせうしゆんたら。によせきくあひと申て。虎におとらぬ遊君を十八人すぐり。和田殿ともてなす。され共和田のこゝろざす虎は座敷になかりけり。使を立てめさるゝに。一度の使に参らす。二度の使に返事もせず。三度にもなりしかは。和田大きに腹をたて。異国を見ねは(1才)
- そはしらす。本朝にをみて。武州にちゝぶ。相州に義盛などか打よつてさかもりをせんするに。めさずとも出あひ酌をもとり。いまやうをもうたひ推参せんこそほんにて有へきに。かほとにめすにいでは

ぬ虎はふしきの者かな。山下内を出よといへあさいなとこそ怒られけれ。母の長者聞しめしあしかりなんとおほしめし。虎ごせのあたりし。一間所に立よつて。障子を隔ての給ひけるは。いかにとらごせ。たとひまん／＼の事ありとも。たゞ今出て。和田の前にて(1ウ)

酌とつて三浦へ返し申されよ。「サシ」それ普天の下に生を受。王土に其身を置事は。大事にてあらず。や。「コトハ」とらごせとありしかは。虎此よしを聞よりも。あらうたての母のおほせやさふらふ。賢人は二君につかへす。帝女両夫にまみえすと。申す本文こそさふらへ。貧なる者と思ひながら。助成に契約し。又助成を引かへて。和田に契約あらんとや。思ひもよらぬ事成へし。「カ、ルフシ」虎は是に有つるか。「同」世になし者の。十郎とちきりをこめ。鎌倉のかたへと(2オ)

も。申させ給へ。母上と召とも虎は。出さりけり。「コトハ」長者至極のはらにすゑかね。いかにとらごせ。むかしも親に孝ある輩を。わごせに語て聞すへし。それ伯瑜は母にうたれ。うつ杖をはかなしまて。よはる杖に音をそなく。秦の孟宗は。時ならぬしはすに。母のねかひものにとて。箒をもとむるに。雪空山にふりみち。たかなさらになかりけり。諸天是をあはれみ給ひて。雪の中に竹の子三本そだつ。是をとり。八十にあまり給ふ母のねがひをみて(2ウ)

けるととき。郭巨といへるものは。母を養ひかね。我か子を土にうつまんと。打ける鍬の下よりも。金子の釜を掘し二度長者になるととき。さる程に人の子の。種をおろす計略は。梵天よりも糸ををろし。大海

の底なる。針のみををすよりも猶受かたふて生るゝなり。二百七十余日は。胎内に宿り。神仏にもいまれ申。九品の浄土へ参る事もなし。たま／＼人に生れける。其時のくるしみは。いきたる牛のかわをばぎ。千枳のその中へ。「カ、ルフシ」追入るより(3オ)

たえかたし。「同」けんとう。せせつの冬の夜は。釜をかさねはこくめり。きうか。さんふくの夏の夜は。松風にたはむれて。空吹風を。招よせをよそ。妻子を。はごくめり。「コトハ」三歳になるまでのみたる乳味を。凡夫いかてかちるへきそ。忝も釈尊。閑に讚歎して見給ふに。をよそ一百八十石にしるさるゝ。此ことほりをきく時は。白き骨は父のおん。しゝむらは母の恩。報しても報しかたきを父の恩ととかれ。しやしてもしやしかたきを。母の恩ととかれたり(3ウ)

。じふおんかうに須弥山。ひもおんしんによだいかひ。いづれをほうじ尽すへきそやふとらごせ。只今出て。和田のまへにて酌とつて。三浦へ返し給はすは。惣而あの十郎殿の。馬くら見くるしうして。是またの宿かよひを。おもひとゝまり給へと。あらゝかにの給ひて。長者。さしきになをられしは。十郎殿の為にはめんぼくなぞ聞えける。「サシ」助成左右眼に涙をうかへ。それ天人の五すい人間の八苦とて。八の苦のその中に。「コトハ」あはれたゝひんく程物うき事は(4オ)

よもあらし。貧苦とたにもなりしかは。うとき人にはいやしまれ。したしき中は遠くなる。けふ此比すけ成なんどか。頼めたらんずるゆふくんを。おそらくはあのとのおぼらがぶんとして。遊君出せ。さかもり

せんなんとゝいはじなれ共。世にしたがへば力なし。侍か侍にむかつて。うでくびをにきり。「カ、ルフシ」きちしよくするは。ならひなり。「同」よをも人も。葛のはの。くずの葉の。うらむへきにてなしやとて。樊噲そねむすけ成も。我が身の程を勸じつゝ。袂を顔に。をし当て泣(4ウ)

より外の。事はなし。「コトハ」虎此よしを見るよりも。何をの給ふそ十郎殿。むかしの人の目に見えさふらふか。東方朔か九千歳。うつゝらの八万歳。りうちくわしやうの二万さい。浄妙居士の翁の。一千歳二千さいを。ふるとは申さぶらへど。名をのみ聞て今はなし。「カ、ルモンタイ」あすをしらざる心にて。けふのらくこそ。うれしけれ。「フシ同」轟／＼となるかみも思ふ中をはよもさけじ。一人まします。母のふきやうはかうむるとも。座敷へは出ましき。十郎。とのと語り「コトハ」すけ成(5才)

聞き召れて。あらやさしの女の申事や。か程ゆふなるものを。座敷へ出さぬものならは。長者の恨深かるへしとおほしめし。いかにとらごせ。たゝ今の詞は。山ならはしゆみせん。海ならは蒼海よりも猶たのもしう候か。たゝし。違ふことばの候ぞや。それ親のふきやうと申は私ならぬ事なり。三界を頂てまします仏の御名を。けんらう地神と申。釈尊問給ふ。三かひをいたゝきたるは。何ほと重きそと問給へは。地神答ての給ふ。須弥の山にとうしんを一筋(5ウ)

をいたるとへよりも。猶かるく候か。爰に重き物あり。主のかんとをかうむり。おやのふきやうをえたる者の通る時は。大地がわれて

身かいは。あたりの木草かれはて。河を渡るに瀬たえし。底のうろくすも生を滅し。地神か首に。「カ、ルフシ」七尺の劔をたつるより。「同」たいかたしとの給へは。釈尊も阿弥陀仏。三世の諸仏達舌を。まいてそ。おち給ふ。「コトハ」又五障と申は。五の巻の提婆品に。一しやふとくさほん天王。二しや帝釈三しや(6才)

まわう。四しや転輪浄王五しや仏心と説れ。女に五つの障あり。又三従と申事は。幼なきときに。父はゝの家とて家をもたねは。親に随ふ苦一つ。わかくさかんなる時。夫の家とて家をもたねは。妻にしたかふく一つ。さて老しての其後に。子共の家とて家をもたねは。子にしたかへる苦一つ。「カ、ルフシ」されは仏のとかれたり。「同」三かひにかきもなし。六道に。ほとりなし女にみつの。家なしと爰を。ほとけのとき給ふ。「コトハ」此ことはりをきく時は。ふきやうに過(6ウ)

たる科そなき。唯今出て。和田か前にて酌とつて。三浦へかへし給はすは。名残おしうは候らへ共すけ成は曾我へ帰るへし。虎此よしをきくよりも。あらうたての人の仰やさふらふ。はゝこの御ふきやうあらんと仰さふらふをさへ。御身にかへて思ひしに。御身の左様にの給はゝ。さらは出んと云まゝに。十二ひとへのそはをとり。座敷へそ出にける。つもる年は十七歳。海道二番の遊君を。おとなけなくも義盛の。とらに心をかけられしは理りとこそ聞えけれ。虎こせ出て(7才)

。和田殿ともてなす。されとも盃のきやうたい心にいらす。義盛御ら

んあつて。いかにとらせ。御身の盃のきやうたいの心にそますみゆるは。いかさまつまの十郎か内にあるか。ゐたらは出て酒のめと。使を立よとらせ。虎なゝめによるこふて。十郎のかたへ使をたつる。助成出し物と思はれるか。いや。出ぬ程ならば。おくしたりと思召し。俄の事にてある間かけ多ほしをそ着たりける。夏野、摺尽しの直垂。九寸五分のよろひをし。だみたる(7ウ)

扇おとりそへまへはんにさいたりけり。大幕つかんて打あけ。助成是に候と。座敷をきつと見たりければ。著座には。義盛をはしめ。虎も長者。一門九十三騎。車座にはらりとあなかれて助成かみふする座敷はなし。爰に和田の右座に。たゞみか一でうあいた。和田は三うらの太将とて。恐をなしてなをるものこそなかりけれ。助成御覽あつて。あらことくしや。和田といふに三浦の太将。助成は伊藤の太将。まんこかくなる侍か。和田かみふする座(8才)

しきに。助成かみましいかと。おめす。おくせすはゝからて。右座にむつすとなをる。かくて盃三献とをつてのち。はゝの長者。蒔絵の槃に。紅葉のかわらけをすへて出。とらせのまへにをき。いかに虎こそ。所詮その盃ひとつのふて。何方へもおもおふするかたへさし給へ。虎此由を聞よりも。あら六かしの母の仰やさふらふ。和田へならばよし盛へ。十郎へならばすけ成へ。させとは仰なくして。いつかたへもおもおふするかたへとは。和田にさすならば十郎のうらみ。又(8ウ)

十郎にさすならば。和田の恨あり。とやせんかくやあらまじと

名古屋市立大学人文社会学部研究紀要 第二十号 二〇〇六年三月

〔カ、ル片ツメ〕案したりし有様を 〔同〕物によくくたふれば。明石の浦の人丸の。硯と筆と料紙を。そはにをかせ給ひて。出る船入舟。たつなみ。ふく風によそへて。三十一字の言の葉に。もらさしと案し給ひしも。是にはいかてまさるへき。ふかく物にたとふるに。太国の事なるに帝一人おはします。みかとの御名をは。玄宗。皇帝と申。然に皇帝に三千人の后あり。第一の后を。くし君(9才)

と申。さて其次の后を。こうのをのやうけんみんの御娘楊貴妃とこそ申けれ。然にやうきひ。三国一の美人たり。帝てうあひ斜ならず公卿僉儀まちたり。賤き。非侍の子共。楊貴妃か。一の后にそなはらは。百敷や大宮人をふり捨。我々大裏を。罷出んと奏聞す。右をくたりに。やうけんみんの一統。ぐし君の一の后にそなはらは。百敷や大宮人をふり捨。われく大裏を。罷出んとそうもんす。御門此事を。えいらんま(9ウ)

しくくやうくしの有さまや。あなたをいはへは。こなたのうらみありまつたこなたをいはへは。あなたのうらみあり。何方の恨をもおはぬやうにとおほしめし。天宝十二年。七月七日の日。紫宸殿のかくのまに二人のきさき召れて。瑠璃の槃に。白石。黒石のじやうずに。水牛の角の籬を。白かねの筒にいれ。はやく三番一徳の勝負にかけて位を。あらそひ給へ。后たちと宣旨ある后は聞し召れて。恨も恋も残らす。さらはうたんとて。さいの目を(10才)

合らるゝ始のかちは楊貴妃。その次はくし君。手詰の勝負になつて。おりはになりぬれば。やうきひの乞目に。でう三のこはれたり。ぐし

君の乞めに。でう四をこはれたり。両の心いくはくそてう三にもてう四にも。かたきつておりすして。筒のうちて此簾あふ二つつゝにわれは四つになつて出にけり。楊貴妃のこはれたる。でう三もおりてあり。ぐし君のこはれたる。でう四もおりてあり。帝えいらんましゝてやさしのさいや。汝は牛の角なれ(10ウ)

と人の心をちゝにしつて。さやうにふるまふかや。さらは官をなせとて。さいの目に朱をさいて。其時までは。でつちじうに。でう三てう四でくてう六と申せしを。しゆ三しう四と申事此御世よりもはしまれり。そのさいと申は。ものゝ心をしつたれば二つがわれ四つで出二人の後そなはる。そのことくみづからもさしたき方は両かたなり。盃は一つ。ふたつにわたれてのけかしとちぐさにものを案しける。いや虎こそ的心中たとへんかたはなかりけり。「コトハ」かくて(11オ)

時刻もうつりければ。長者御覽あつて。あらをそやとらせ。所詮その盃ひとつのふて。何方へも思おふるかたへさし給へ。虎此よしを聞よりも。是はさなから母こは。物にくるはせ給ふかや。此御詞のなかりせは。老人なり客人なり。和田にこそさすへきに。此御詞をきゝながら。和田にさすならば。海道七か国の遊君のなをりたるへし。なんでう此さかつきをは。和田にはさすましいもの。妻の十郎すけ成にさそうす。おのこならばとつてのまふす。呑程ならば(11ウ)

朝比奈か古郡か座敷をたてそせんすらん。其時みつから。うへこそ女なりとも。心は男子に違ふましい。「サシイロ」あらなさけなしとよ和田殿。色ある人に色なきは花見て枝を。手折。かや。「コトハ」爰

をはひたすらみつからに。ゆるさせ給へと。さゆるていにもてなし。あさいなかめてのわきなる刀をひんはうて。わたのこゝろもとにさしたて。かへさん刀にてみつから自害し。「サシイロ」妻の十郎に腹きらせて。死出三途の大河を。助成と手に手をとりくんでゆかはやと。たゝ一筋(12オ)

に。思ひきる。「コトハ」なふいかに一門の人々。はゝこの思ひさしせよと仰さふらふほとに。余所のけもさふらふましいと。妻の十郎助成に盃をむすとさす。すけ成御覽あつて。のふてはことあしかりなん。いかゝはせんとおほしめすか。いやゝ。のまぬ程ならば。おくしたりとおほしめし。あらめつらしの御盃や候ともつて三度そくんだりける。義盛御らんあつて気色を引かへ。やあ十郎。たゝ今のさかつきをは。のむましい盃なれとも。まさしうよし盛を下て(12ウ)

とつてのふするものかな。それ盃をはのむほうかあるそ。しせんわかいとのはら。河かり狩くら打過。ゆふくんのもとへ打よつて酒をのむに。おもはしきゆふくんかひとつくんで。此盃をは。あれにまします客人へと。さいたるをとつてのふするこそ面目なれ。さすは日比の女のむは日比のおつと。二人のものか立出てまつた。座しきに人もないやうに。盃をさしかよはしのふするところ。よしもりか存知には抜群へに)ちかふて存するなり。それ。老たをもつてうやまふを父母(13オ)

のことし。わかきをもつて愛するを師弟のことし。「ツメ同」しるをもつて人輪しらぬは鬼畜木石。はうはいのこらしめに座しきをとつて

追立よはやたてよとそいからるゝ。かみをまなふ下なれば。下座なる若もの。そはなるうちものを。ひつたをし／＼。鯛もとをくつろけ。おほせにて候そ。たてと追立る。いたはしやすけ成。からのかゝみて身はひとつ。たつもさすかなり。いふん三十にいたつて。軸々になをきんきよくのこゑあり。河津殿の御名を。くたさし(13ウ)

ものと存すれば。いかに和田殿。大名なれと。三浦の太将助成は身こそひんなれと伊藤のこれは太将。まつこかくなる侍に。当座のはちを。あたへ給ふものかな。たゝ今座しきを。たてうするものはそも。おつはたに孫太郎。糸久に源八ゑがらの午太種長。朝比奈そあるらんた一人か立されはうしろのていのさひしきに。よし盛も立給へと。かたなの鯉口を。三寸計くつろけ。たもとのしたにかくしをき。はんしかうて待ゐた。いや。助なりの心中は深淵(14才)

にのそんて薄氷をふむかことくなり。「コトハ」あらいたはしやすけ成。こゝろにおほしめしかへす。時宗か此事を。度々せいふんしつるものを。なふ十郎殿それ宿かよひと申は。有徳なる人のを人のうらやみ。ひんなるものゝ宿かよひをはかならず人のにくみ候。「サシ」馬ののりあひ笠とかめにすけなりうたれ給ひなは。時宗一人残り居。親のかたきと申御身のかたきといひ何としてかは。うつへ。きそ「コトハ」ひらに。おもひとゝまり給へと。度々せいふんしつるものを(14ウ)

用ずし打越。あさいなかふる郡か手にかゝつて。討れん事は治定。死せんいのちは。露ちり程おしからねとも。年来の親のかたき。すけ恒

をはうたすして。しやうかひをうしなひ何かせん。朝比奈の三郎か。座しきをたてといふならばたゝはやとこそおもはれけれ。かくおほしめしけるか。曾我へや通しけん。五郎時宗は。古井といつしところ。矢の根をみかひてゐたりしか。あまりのねむさに。碁盤引よせまくらにしゆたかにこそふしにけれ。舎兄(15才)

すけ成まくらかみに立よらせ給ひ。やあ五郎。それ長良か四十二ヶ条の兵法の巻物を。学したりといへと。さけを過しぬればなんにもおとれり。千日したる用心も。目をつよくぬれば。たつた一夜に無になるそ。おきよ／＼と。二三度四五度。おこさせ給ふと夢に見かつはとおき。あたりを見るに人もなし。ふしきやと思ひ。下女を近づけて。十郎殿はととへは。下女承り。さんさふらぶ宵よりも。大儀にて是は留守と申。時宗こゝろに(15ウ)

案しけるは。さてはかたき公藤助恒か。一騎うつて通るを。時宗たにも有ならば。はちある矢をも一筋射て。はらきらんとおほしめすかく面かけにたつか。さらすは。坂東海道。十五ヶ国の人々の。うつてとをらせ給ふか。十郎殿はたゝ一騎と。した目にかけてねむるかかく面かけにたつか。その儀にて有ならば。諏訪の上下も御知現あれ。舎兄助成のかけを。人にはふますましいといふまゝに。ちやうたいへつと入。上文字うつたる。からうとのふたをあけ。祖父(16才)

伊藤殿よりもつたはつたる。さかおもたかのはら巻。四人してもちけるを。わたかみつかんでひつたてゝ草すりなかにさつくときる。刀と申に。かたき公藤助恒。箱根まふてのありしとき。見くるしけなれと

もとてえさせたる。赤木の欄にしかねの。目貫とうかねうつたりしこ
さすかをさいたりけり。太刀と申に河津殿。奥野ゝかへりあしるとき。
やみ／＼とうたれさせ給ひしとき。是をば。箱王にとらせよと。かた
見にくたし給はつたる。四尺八寸(16ウ)

有けるか。ぬけは玉ちる計なるを。しろきたつなにて。まん中をむつ
すとゆふてわつそくにかくる。みまへはしり出て見てあれば。折節鹿
毛なる駒に。湯洗ひしてそ置にける。くらをかん隙のあらされは。は
つなはらかけ引ちきつてあらひ轡をはめさせ。引よせて打のり。まは
れは三里。すくにうては五十丁。まはらは時刻うつりなんとおもひ。
曾我中村にさしかかり。かけあをつてはしと／＼うち。しと／＼うつては
かけあをり。駒にしらあわかませ(17オ)

。たつた一うちにといそひたる。時宗か心中。明日は。無間からこく
の。えんふのちりともならはなれ。けふにをいて時宗あつたのもしう
そ見えにける。せつなかに間に長者の宿所につく。門外をみてあれば。
くらを馬かいくともあり。されはこそと思ひ。大みかとよりいらんな。
大はら巻に大太刀。座敷の躰ことなしと思ひこみかとにまはる。爰に
下女か一人ゆきあふた。やあ。此やかたに何事かありつるそとへは。
下女承り。さんさふらふ宵よりも(17ウ)

。和田の義盛。一門九十三騎を引くし。打よらせ給ひて。さかもりの
さふらふ座しきへ。十郎殿もとらせも。出させ給ひて。さかつきの
口論かたゝ今なかはなりと申。時宗聞て。そのさかつきをば。和田に
さいたるか十郎にさいたるか。下女承り。虎こせのやさしうまし／＼

て。十郎殿の御かたへさゝせ給ひてさふらふ。さてその盃を。おくし
てとつてのまさりけるか。なふ御ころやすくおほしめせとつてまい
りてさふらふ。時宗きいて。から／＼と打わらひ。日本六拾六か(18
オ)

国に。大剛の兵者。又ふたりとよもあらし。舎兄すけ成にてとゝめた
り。賢仁なる女。よにおほしと云とも。虎にましたる賢女よもあらし。
虎なればこそさいたれ。十郎殿なればこそ。おゝいかたきのその中で。
おくせいてのふてあり。「カ、ルモンタイ」のふたりや十郎との、
さいたりやとらせと。「フシ同」いや太刀のつかを。たゝいてひと
り。かんして立にけり。「ツメ」扱いつくから行そなたへいらせ給
へとて。眠廊回廊。孫庇をさし過。障子を一間へたて。あれなるは
(18ウ)

新左衛門。古郡左衛門。海老田兵衛。足田びやうゑ。すの崎の孫太郎。
こゝなるは十郎殿と。いち／＼にをしへけり。時宗是をきゝ。たとひ
何ものなりとも。舎兄すけ成にとんでかゝるものあらは。しやうじの
一間もの／＼しゝ。はら／＼とふみやふつて。太将とかしつく。和田
かほそくび。ちうにつんと打落し。あさいなか眉間。から竹わりとい
ふものにふたつにさつと打わり。のこりのやつはら。年にもたらぬし
よくわんともものゝ数にて数ならず将基たをしを(19オ)

することく。さん／＼にきつて捨。舎兄助成と。さしちかへてしなん
な。あふあんの内と存すれば。ふんぢかつてたつた。多門持国増長。
いや作りすへた二王にちつともちかはさりけり。「コトハ」かくて時

刻もうつりければ。義盛御らんあつて。朝比奈はなきか。汝は日比のちせうにはにぬものかな。あの十郎をとつて追立ぬそ。はやたてよとそいからるゝ。あさいな心に案しけるは。あふさいたるも道理。又のふたるも道理。「サシイロ」その上ゆみ取はけふは(19ウ)

人の上。あすはわか身の上成へし。さすがに名ある人々に。いかにとして恥を。見すへき。「コトハ」実哉覽此とのはら兄弟は。魚と水とのことくにて。あにか酒をのめは弟かのみ。弟かのみは兄かのみ。たがひに用心をするときいつる物を。いまも弟の五郎時宗か。内に有らんに。あしうかゝつて。ざしきをはたてそんしまつかうわれ。

あしかりなんと存すれば。人もはやさぬ舞をたつてそ舞たりける。うすおしきのそはをとり。その北海道にはや(20オ)

りし。硯割といふ哥のたいをはつたとあけ。「カ、ルモンタイ」半時ふんてぞ。まはりける。「フシ同」よしやあしゝとて。きりすてられし呉竹も。くもとに一よは。あるものを。よしやあしゝとて。つき捨られし。庭草も。もと忍ふとてあるものを。よし盛此事を。御はらいさせ給ふへし。十郎殿も虎こせも。心にかけたまふなよ。一向この。義秀にゆるし。給ふへきなりと。はんじふんてそまはりける。朝比奈か心さし。生々世々に。いたるまでわすれ。かたくそ覚ける

〔コトハ〕舞も(20ウ)

過時分の事なるに。障子の内にかな物のをとからりとなつた。されはこそとおもひ。爰をちつと御免なれと云儘に。相の障子をさつとあけ。内を見入てみてあれは。なひは知らね共。七尺ゆたかなる大男。

名古屋市立大学人文社会学部研究紀要 第二十号 二〇〇六年三月

胸板みたればまつしろなるか。五尺余りなる大太刀を。七八寸くつろけ。かゝらはきりよけに見えければ。鬼のやうなる朝比奈もたゝ膝ふるうてそ立たりける。いかにや御身は。五郎殿にてましますか。舎兄助成も座敷にましますに。など出てさかもりをし給はぬそと(21オ)ありしかは。時宗きいて。畏り入ては候らへ共。びやくえで候。あさいな心に案しけるは。実哉覽五郎は。蛇につなを付たりとも。馬ならはのらんと。剛言すると聞つる物を。座狂ながら実に。力の程をためさはやと思ひ。げにごへんは出ましいかと云儘に。はしりかゝつて。腹巻の草摺二三枚。胴の板にひつしめ。前へえいやと引けれ共ちつとも更にはたらかす。ゑげに是はつよかりけるや。三浦一門は九十三騎。連判は。四百八十余人か中に。小林のあさいなとて。名にしあふ(21ウ)

たる某か。五郎を只今座敷へ。「カ、ルツメ」引出さぬ物ならば。〔同〕生害なりと思ひて。朝比奈の三郎か。力のでくるしるしには。左右のうでとかいなに。力筋といふ物か。十四五二三ふつくと出にけり。胸を生る力毛。碁檠の表に。銅の針を。すりならへたかことく也。胴の筋かひたへあかり額の筋か胴へさかり。物に能々たとふれは。きやうちやうの藤か。松をからんて。麒麟か友をこうたるにちつともちはささりけりあふ。ぎやうくしの有様や。うさみくずみ河津三ヶ庄のうちに(22オ)して。あら馬のつての大力の五郎と呼ばれて。朝比奈程の小男に。やみくくとひかれて座しきへは出ましいもの。けにつよう引ならば。三

枚の。草すりかきるゝか。ひざのふしかちかふか。ふまいた板か。大地へ落つくか。三つに一つは。ぢやうのものと心得。ふんぢかつた。ばつしんをいらゝけ。前へえいと引た。後へゑいと引た。草摺きれてのきけれと立所をさらずして。ふんじかつた。いやそかの五郎時宗を大力と申ておちぬものこそなかりけれ (22ウ)

〔コトハ〕三枚の草摺をもつて。父の御前に参り。五郎時宗こそ。内にゐられて候らへ。是を着にて。さかもりをし給ふへしとありしかは。義盛氣色を引かへ。何五郎殿のうちにましますとや。舎兄助成も座敷にましますに。など出てさかもりをし給はぬそと有しかは。時宗きいて。畏入ては候らへ共。びやくえでさうとて音もせず。去程に十郎殿。

弟の五郎時宗か 〔イロ〕内にあるとたにも聞ければ 〔コトハ〕たゝ鬼満国の鬼王と。羅仙国の羅王を。あざ (23才)

むくほとをつわものを。千騎。万騎もつたるよりも猶たのもしうそ思はれける。いかにや五郎かあるか。おとな侍の召のあるに。など出てお酌を申さぬそ。びやくゑで候。御免有そたゝ参れ。承ると申て。大腹巻をきながら。大太刀を持たからしとけなけにそ出にける。爰に古郡のめての対座に。詰座にちやうとなをつた。古郡殿御覧して。是程ひろい座しきにて。つめさかもりはしゆふぞうぞ。そこをちつとくつろけ給へさかもりせん。とき宗 (23ウ)

きいて。なんさう古郡殿。参れと仰あれはこそ参りたるに。座しきをたてと仰あらは。只今罷立んと云まゝに。腹巻の草の草摺二三枚。膝の上にゆけかけ。猶つめかけてなをつたるはけうさめてそ見えにける。

義盛御らんあつて。いかにや五郎との。御身幼少にて箱根に上り。別当の御坊にて学文めされ。其後伊豆に下り。北条を烏帽子親にたのませ給ひ。五郎時宗と。名のらせ給ふとは承はれ共。見参は是かはしめ。それくゝと有し (24才)

かは。承ると申て。青黄匂ひの腹巻に太刀取添てそ引にける。時宗是を見て。只今の引出ものを。とらはやと思ふか。いやくゝ。まてしはし我かこゝろ。明日にもなるならば。坂東海道十五ヶ国の人々の。伝きこしめされて。むさんや曾我とのはら兄弟は。身のひんなるに随て。引出物にめて。遊君を和田へうばはれたるなんとゝいはんな。高難なりと存すれば。いかに和田殿。たゝ今の引出物を。是にて給はりたくは候らへ共。後日に三浦へ参り (24ウ)

給はるへし。それ迄は。あれにましますわかい人に。あつけ申とて。わたかみをかいつかんで。しも座へからりとなけ出す。義盛御らんあつて。たゝ今のふせいは。れうけんさうか五郎との。ざけうざうか時宗。時むねきいて。なんさう和田殿。世にある人の上にこそ。れうけん左興も候らへ。貧なるものゝざけうはしらぬてさうと申。義盛聞し召し。あしかりなんとおほしめし 〔カ、ル片ツメ〕ようさう五郎殿 〔同〕いとま申て長者とて座敷を立せ給へは。九十三騎。はら (25才)

りと立て。爰やかしこにて駒引よせくゝひらりくゝと打のる。其中に和田殿。太将てましますはえんのはなへ馬ひかせ。のらんとし給ふを。時宗これを見以前に舎兄助成に。こめを見せたことくに。おとさはや

と思ひて。四角なる眼を。五角にくわつと見ひらき。いかに和田殿。此屋かたと申は。わた殿も建られす十郎殿もたてられす。まつた時宗かたてたる事も候らはす。坂東は八か国。海道は七ヶ国十五か国の人々の辻さかもりの其為にたて(25ウ)

をかれたるやかたなり。是からの乗うち。ひろうさうそ和田殿。おりさせ給ひ候らへ。おりられぬ物ならば諏訪八幡も御知現あれ。時宗かた々今おろすへしとそおとしける。義盛聞し召し。いや／＼きやつはら。身を捨るものによせ合爰にて事をしいたし。若堂うたせ。あしかりなんとおほしめし。ようさう五郎殿。歳はよつつ目は見えす日は暮かたになりさうつ。くら具足見ん為にひかせてこそは候らへ。それ／＼わかたう馬ひけやと(26オ)

ありしかは。承ると申て。しつけ坂迄ひいたる五郎におぢた所なり。兄弟の人々袴のそはをたくとり。弓矢の礼儀は。是迄候はや／＼召れ候らへとく／＼召れ候らへと引はしまてそをくりける。其のち兄弟屋かたにかへつて。もしも三浦より夜討によせやせんとして。よまはり辻かため用心きひしかりけれと。一門の中なればよする事こそなかりけれ此人々の心中をは。貴賤上下おしなめ。かんせぬ人はなかりけり(26ウ)

【校異】

本曲の校異に使用した諸本は次のとおり。(内)内閣文庫本、(毛)毛利家本、(打)打波家本、(直)直熊本、(東)東大本、(松)松村本、

名古屋市立大学人文社会学部研究紀要 第二十号 二〇〇六年三月

(慶)慶応大学蔵伝小八郎本

1オ ○かうせうしゆんとらによせきくあひと申て―(内・慶)ナシ、
(毛・打・直)くわうしやうしゆむによせきくあひと申して ○
すぐり―(内・慶)すぐつて、(毛・打・直)出し

1ウ ○そはしらす―(内・慶)しらす ○聞しめし―(毛・直)ナシ
シ ○いかにとらごせ―(内・慶)ナシ

2ウ ○いかにとらごせ―(内・慶)いかにとらごせきくたまへ ○
時ならぬしはすに母のねかひものにとて―(内・毛・直・慶)
はのねかひものに時ならぬしわすに ○雪空山にふりみち―
(直)ナシ

3オ ○種をおろす計略は―(内・毛・打・直・慶)たいないにやと

りたねをおろすはかり事 ○生るゝなり―(内・慶)まふけたり
3ウ ○三歳になるまで―(内・慶)さるほとに人の子の三歳に成迄

○閑に讚歎して―(内)たんとくせんのかたわらにて静にさん
をおき さんたんし、(毛・直)檀特山の傍にて閑にさむだんし
て、(慶)檀徳山のかたはらにてしづかにだんし、(打)「たんと
くせんの片原にて」しづかにさんたんして(ハ補入)

4オ ○返し給はすは―(内・慶)かへさぬものならば、(毛・打・
直・松・東)かへし申さすは ○見くるしうして是までの―(内
・慶)みくるしき体にて相模の曾我よりは是までの

4ウ ○貧苦とたにもなりしかはうとき人はいやしなれしき中

は遠くなる―(内・慶) ナシ、(毛・打・直・松・東) 貧苦だにも成ぬればしたしき人にはとをく成うとき人にはいやしまれ

5才 ○見るよりも―(内・慶) うちきいて、(毛・打・直・松・東) 聞よりも

5ウ ○か程ゆふなるものを―(内・慶) かほとなるゆふくんを ○三界を―(内・慶) さんせんたいせかひを、(毛・打・直) 大地を ○三かひをいたゝきたるは何ほと重きそと―(内・慶) 三界はいかほとをもきそと、(毛・打・直) 大地を戴ひたるはいかほど重きぞと

6才 ○主のかんとうをかうむりおやのふきやうをえたる―(内・慶) 親の不孝を得主のかんたうかうむりたる

7才 ○三浦へかへし給はずは―(内・慶) 三浦へかへさぬ物ならば、(毛・打・直・松・東) 三浦へ返し給へさなき物ならば ○きくよりもあらうたての人の仰やさふらふ―(内・慶) うちきいて ○さらは出んと云まゝに―(内・慶) さらは座敷へいてんとて ○そはをとり―(内) 花のつまをとつて、(慶) きぬのつまを取て

7ウ ○御らんあつていかにとらせ御身の盃のきやうたいの心にそますみゆるはいかさま―(内・慶) 御覧していかさまとらせのさかつきに心いらすみゆるは ○いや／＼出ぬ程ならば―(内) いてぬ物ならば、(慶) ナシ、(毛) 只今出ぬ物ならば、(直) 只今わ出ぬ物ならば、(打・松・東) いや／＼出ぬものならば ○

摺尽しの直垂―(内・慶) 草つくしのひたゝれ

8才 ○見たりければ―(内・毛・打・松・東) みはたせは

8ウ ○とらせのまへにをき―(毛・打・直) ナシ ○六かしの―(内) うたての ○いつかたへも―(毛) ナシ

10ウ ○ぐし君の乞めにでう四をこはれたり―(直) ナシ

11ウ ○聞よりもはさなから―(内) うち聞てはは

12ウ ○余所のけもふも―(内・慶) おもひさしはちからなしよそのけまふも ○御らんあつて―(毛・打・直) ナシ

13才 ○おもはしきゆふくんか―(他本) さかもりらん舞になつて思はしきゆふくんか ○面目なれ―(内・慶) おのこの時の面目なれ

14ウ ○あらいたはしやすけ成―(内・慶) 去間祐成 ○時宗か此事を―(内・慶) むさんや弟の五郎時宗が此事を ○なふ十郎殿―(内・慶) ナシ ○有徳なる人のを―(内・慶) うとく成人の宿かよひをは ○うたれ給ひまは時宗一人残り居―(内・慶) うたれたまひて後 ○ひらに―(内・慶) たゝ／＼しゆくかよひを

15才 ○年来の親のかたき―(内・慶) 年来の ○たゝはやとこそ―(毛・打・直) さあらぬていにもてなしたゝばやとこそ ○かくおほしめしけるか―(内) かくおもひける事か、(毛) かくおぼしめすが、(打) かくおほしめす事か、(直) 角をもはれけるが、(松・東) かく思しめしける事が

15ウ ○やあ五郎―(毛) いかに五郎、(内・慶) いかにや五郎 ○

- おきよ／＼と―(内・慶)かほとのはくちうに左様にゆたかに臥
かおきよ／＼と ○下女承りさんさふらふ―(他本)ナシ ○時
宗ころろに案しけるは―(内・慶)ナシ、(毛・直)時宗聞て
- 16才 ○さらすは坂東海道十五ヶ国の人々のうつてとをらせ給ふか十
郎殿はたゝ一騎とした目にかけてねむるかかく面かけにたつか―
(内・慶)ナシ
- 16ウ ○やみ／＼と―(内・毛・打・直・慶)をうみのことうたやは
た三良か一二のまふしをかためはなちける矢にあたり聞／＼と
- 17才 ○かけあをつてはしとゝうちしとゝうつてはかけあをり―(内
・慶)しとゝうつてはかけあほちかけあはちてはしとゝうち
- 17ウ ○されはこそと思ひ―(他本)ナシ
- 18才 ○一門九十三騎を引くし打よらせ給ひて―(内・打・慶)九十
三騎打よせたまひて ○時宗聞て―(内・慶)扱、(毛・打・直
・松・東)時宗きひてさて ○下女承り―(他本)ナシ ○さゝ
せ給ひてさふらふ―(内・慶)さゝせたまひたるといへは
- 18ウ ○よもあらし―(他本)なかりけり ○とゝめたり―(他本)
ましますや
- 19ウ ○朝比奈はなきか―(内・慶)やあ朝比奈
- 20才 ○うすおしきのそはをとり―(内・慶)ナシ
- 21才 ○時分の事なるに―(内・慶)時分にみへし時
- 21ウ ○畏り入ては候らへ共―(内・慶)御覽せられ候ことく、(毛
・打・直・松・東)かしこまつては候へとも御覽せられ候ことく
(笈さかし)
- 23才 ○父の御前に参り―(内・慶)父の御前のかしこまり是／＼御
覽候へ、(松・東)父の御前に参りこれ／＼御覽候へ ○畏入て
は候らへ共―(内・慶)ナシ
- 23ウ ○いかにや五郎かあるか―(内・慶)なに五郎か内にあるか
○しゆふぞうぞ―(内・慶)無用さうぞ、(毛・打・東)しよ
うぞ、(直)しよざうぞ、(松)しよざうぞ
- 24才 ○烏帽子親にたのませ給ひ―(毛)たのみ
- 24ウ ○承ると申て―(他本)ナシ ○是を見て―(毛・直・松・
東)ナシ ○只今の引出ものを―(内・慶)あつはれ具足や ○
ましてはし我がころろ―(内・毛・打・慶)ナシ ○なんとゝい
はんな―(他本)なんとゝ申さんときは ○いかに和田殿―(内
・慶)ナシ ○是にて給はりたくは候らへ共―(他本)給り度は
候へとも ○後日に三浦へ参り給はるへしそれ迄はあれにまし
すわかい人にあつけ申とて―(毛・打・直)存る子細の候あれに
まします若き人にあづけ申す後日に三浦へまいり給はらんと云
まゝに、(松・東)あれにましますわかい人に預け申す後日に三
浦へ参り給らんと云まゝに
- 25才 ○しも座へからりと―(内・慶)すそさへからりと ○れうけ
んさうか五郎とのぎけうざうか時宗―(内・慶)さけうざうか五
郎殿れうけんさうか時宗

さる間むさし坊弁慶はとがしか。館にて勸進帳奉加帳を。こと／＼くよみ山ければ。とかしよく／＼聴聞有て。あら殊勝や。誠に南都のすゝめにて御座有けるを。存申さて一時なれ共しらすにたて申つる事。さこそ仏神三ほうもにくしとおほしめされつらん。こなたへ御入候らへとて弁慶を請せらるゝ。武蔵安堵の思ひをなして。今は笈を爰にをかはやと思ふか。いや／＼。しれたるものに笈扱され。あしかりなんと存すれば。笈かけながら座敷にむすとをなをる(1才)

富樫御らん有て。小勸進にては候らへともとて。巻絹五十疋むさしか前につませらるゝ。とかしの北のかたをはしめ。そのほか心さしの人々は。武蔵殿かまへに宝の山をつむ。弁慶是をみて。あらおびたゝしの御奉加共や候。たゝ今も給はりたくは候らへとも。存するしさいの候。こうする三月(に)是よりも都へ付てたべと申。とかし。きいて京はなん条ととはるゝ。むさしいつもいひ付たれば。都は三条河原崎の。弁慶かもとへ付てたべと。いはんずと心さして。あふみやこは三でう(1ウ)

かはらさきの。弁といひしか。「カ、ルフシ」あつと思ひて。「同」弁宗の御坊へ付てたべとそのべにける。さらはお暇申とて。たかひにいとまを乞こはれ。とかしかたちをそ出にける。み満堂に参りて。君にかくと申ければ。武蔵どのにてなかり。たゝ八幡の。御けんけとて御手を。合給ひけり。「コトハ」その夜は宮の腰さら竹の大明神に一夜のつやを申。よをこめて出させ給ふ。みや人申けるやうは。是より越中へのお下向は中々かなひ候まし。それをいかにと申に。くりから

のたうげをは。となみの七郎か七百(2才)

余騎にてさゝへ。山ふしを通し申さす。能登と加賀との堺をは。塩の小太郎かふせき。山伏を通し申さす。越中へのお下向はおもひよらすと申す。弁慶はまに下り。もしのとのかたへ下る舟や有そとふたりける。折ふし鈴のみさきへ下る舟こそ候らひけれ。この舟に便船し。其日の内に能登の国。鈴のみさきにつかせ給ふ。「サシクトキ」御舟よりもあからせ給ひ。汀の岩に腰をかけて。あたりのていを見給ふに。せきがながとそびへ。風ちゞんだる万木は絵に書たるか。こと(2ウ)

くなり。西の沖ははてしもなく。蒼海雲を浸し。ろかいを渡るこし舟や。「フシ同」浪間に。かづきうきしつむ。水にはふれて飛かもめ。汀の岩に。波かけて底あら磯の岩まにも。くだけて見ゆるうつせ貝。人のこゝろはあら磯の。かた思ひなる鮑貝海松和布。なおりそとらんとて。海士とも海に。おりひたりかつきの為に。うきしつむ。「コトハ」さる間弁慶は。とある岩間よりも。辛螺にみるめの付たるをとり上て。ごんぜんへまいらせ上る。にしは生てはたらけは。みるめもとにもにうごく。判官御覧(3才)

有て。御前の都に御さあらは。かやうにうこくみるをは。いかてか御らんし候へき。なにかしか徳により。遠国のはてにても。かゝるめいよのもてあそびを。御らんする事よと仰ければ。「イロ」ごんぜん取あへさせたまでは。「サシ」都より。なみのよるひる。うかれきて。道とをくして。うきめ見るかな。「コトハ」判官聞召れて。あら殊勝

の御詠哥や候。頓て御返哥を申さんとて 「イロ」うき目をは。もしほとともに。かき捨て。悦となる鈴のみさきや 「コトハ」此哥になくさみ。今は舟路もたより。なくはる／＼のまはり(3ウ)

をして越中へこそいそかれけれ。磯つたひ嶺つたひ。たえ／＼ほそき谷の道。せきどうさんふしおかみ。越中の国に聞えたるろくどしのわたりにつかせ給ふ。舟にのらんとし給へは。渡し守りか申けるは。此渡りは南都ざうえいの為なり。ちんなくしては渡し申ましい。弁慶聞てやあ。如何成津泊せき／＼にても。山伏の法にて。ちんと云事はなきそたゝわたせと申。ふつつと叶ひ候ましい。舟ちんなくはたゝおもとりあれと申。ちんはなしそがしゝ。遅参せは跡よりもいかなる事(4才)

か出来なんと。ごんぜんの紅の。ちしほの袴とり出し。せんはうつきて舟ちんにはこそあれとてたひにけれ。渡し守か見まいらせ。是は我々か見しり申さぬ物にて。不足には候らへとも。さらはわたし申さんとて。六どうじをこぎわたし 「カゝルモンタイ」はうじ津をあゆみ過 〳岩瀬の渡り 〳けふもはや 「フシ同」打出の宿と打詠。おとをり有しところに。旅(人)あまた行合て。これよりおくへの道すから。少人をあゆませ申ていかてかくだり。給ふへきなふ山ふしと。申けり 「コトハ」判官きこしめされて(4ウ)

。さては舟路ならでは行へきたよりもあらはこそ。便船あれかすと仰けれは。折節越後の直井の津へ。下る舟こそ候らひけれ。天のあとふる事とて。この舟に便船し。直井の津に程なくつかせたまふ。御舟よ

名古屋市立大学人文社会学部研究紀要 第二十号 二〇〇六年三月

りもあからせ給ひ。直井の太郎か宿所に一夜の宿をかり給ふ。浦の人々さしあつまつて。内儀評定するやうは。抑此うらは当国の国府。善光寺へまいる道。惣してあまたの道辻。制札の其上。見もしらぬ山伏たち。せい／＼つかせ給ふは。判官殿かあやしや。いざ(5才)

いざとかめ申さんとて。我もおほしきうらの人。七百人指あつまつて弓箭をたいしひしめいたり。御宿の女房はなさけあるものにて。弁慶をまねきよせ。咄申けるやうは。いたはしや客僧たちを。はうぐはん殿なりとて搦捕。鎌倉へくそくし申さんと。大ぜいそつしたゝ今。むかふなりと申す。弁慶聞て打わらひ。あふうれしくもきかせせ給ひて候物かな。さりながら我々は。羽黒山の山ふしにて。別の子細はよもさふじ。御心安くおほしめせと。さあらぬ躰にもてなし(5ウ)

「サシクトキ」さて君の御前に参り此よしかくと申ければ。ぎけい聞召れて。あはれ実義経は。いかなる月日生れけるそや。天に業のあみをはり。地にさかもきの関をすゑ 「フシ同」五尺にたらぬ。きやうがいをかくし。かねたるかなしさよ 「コトハ」去なから口多しては。詞のあやまりも有へし。御へんたちは山ふしの。嶺の小木とるまなひにて。上の山へいり給へ。よし経一人のこり居。問答してみんする程に。ちんじそんずる物ならば。あいずのかいをふかふぞ。其時おりくたつて。ともにはらをきり候らへ。此(6才)

儀尤然べう候とて。かたはらに立忍ふ。其跡にうら人。うんかごうじやに押よせ。鎌倉殿の御舍弟。大夫の判官義経の。御着あつたる由を承り。直井の太郎か御迎に参りて候。早々御出候らへ。鎌倉へぐそく

三七

し申さんと大音上で呼はる。判官聞召れて。なに判官とのとはいづくに御座候そ。あふさる事有。いつそやの事かとよ。平家を責させ給はん為。十万騎をそつし。おくよりもうつて上らせ給ひしを。羽くろのかたはらにて。そつと見まいらせて候らひしか。只今も千騎に(6ウ)

をとる事はよもさふじ。やはかかほとこのせいに叶はせ給ふへきそ。一夜の宿のなさきに。山伏共に具足たべ。亭の御供申。一方防へしと仰ければ。浦の人々はをき。もつての外にさをいしてあきれてこゝにたつたりけり。直井の太郎か申けるは。判官殿と申は。せいちいさく色しろく。むかふばそつて猿眼に。赤髭にましますと。承及て候か。たゝ今さやうに仰らる。山ふしのぎやうそう。判官殿にをゐてうたかふ所なし。御出候らへ。判官聞召れて。さてはめんくはまことに(7才)

仰候か。次而をもつて音にきく。鎌倉とやらんを見てとをらふにとふしてつれて行給へ。浦の人々承り。いやくもしもなき山伏を。判官殿なりとてからめとり。遙々とかまくらまでぐそくしたればとて。させる高名はなくして。山伏共にのろはれ。よかりつへしとも覺す所詮。笈を給はれ中を見んに。まことの山伏行者ならば。山伏の道具もつへし。そら山伏にてあるならば。山伏の道具よもたし。笈を給はれ中をみるところへに呼はる。判官力に及はせ給はず。八ちやうの笈(7ウ)

を取出して浦人のかたへ渡し給ふ。浦の人々。此おいを取て行

〔カ、ルツメ〕中をひらいて見てあれば 〔同〕まづ一ちやうの笈には金剛戒のまんだら。胎藏戒のまんだら。ごまの次第諸尊の法。数を尽して入にけり。めくらし文かあやしやと。うたかひ申処に。くかみの寺よりも。法師一人きたつて。ことくおかみしつて。あしくしてばちあたるなとてほんのことくにとり納る。二番のおいの中には。けんみつ二しゆのほう。しやつけうのとめいあり。是も忝なしやとて。本のことくにとり納る。第三番(8才)

の笈には。いやさんことつこれい錫杖。くわしや花皿をいれにけり。四番のおいの中には。五だいそのれいぎう不動がうまの諸天。本尊の数をつくしたり。五番の笈の中には。へんちやうがもん往来。かなまなの手本。弘法の御自筆。たうふうのふるい筆。秘本の数を尽したり。しるもしらぬもおしなへていやたつとと申つゝ手を合せぬはなかりけり 〔コトハ〕おいにしさいのさうばこそいざもとらんとぞ云たりける。直井の太郎か申けるは。いかにかた。一(8ウ)

さいの事は卒爾にてはかなはぬそ。残る笈をはたかためにをいたるそ。たゝねんころにさがせと申す実げに是もいはれたりと又。次なるおいをとりて行。中をひらいて見てあれば。判官の都より。持せさせ給ひたる。青黄匂ひの御腹巻。小手小具足取出し。是は山ふしの道具候か。判官きこしめし。扱はめんくは。当国の小山寺の。山ふし共に習て。羽黒山の山ふしの。礼儀をはしろしめされぬよなふ 〔イロ〕そもくはぐろさんと申は役の行者の苔の道 〔コトハ〕山伏の(9才)

ひしよとある。爰に衆徒と名付て。我かまゝに振舞かたあり。山ふし是をねたみ。しんいのいかりたえせず。是によつて武具弓箭を。またぬほつしかさうばこそ。此辺にもあわよき売具足やさふ御ひけいあれ。山ふしのかつちう持事。諸方にかくれさうばこそえゝせけんせはやめん。浦の人々是をき。実々是もさそあるらん。又次なる笈をとりて行。中をひらいて見てあれは。ごんぜんのみやこより。もたせさせ給ひたる。五尺のかづら七尺の(9ウ)

かけ帯。唐の鏡。十二のかけご入たりし。手箱なんとなを取出して。是も山ふしの道具さうか。あらしゆせうと。おこなひすませ給ひたる。山ふしの道具共や候。されはこそ判官殿なれとこゑに呼はる。判官ちつともさわかせ給はず。めんのふしんはことほり。去ながらかけ帯かつら装束のいはれは。此ほつしかために。伯母ごにてまします。羽黒の権現の。一の神子たるにより。今むかふ三十かうの。御輿の御とも申さんため。みやこよりも買くだし給ふ也。扱又(10才)かけご手箱は。越中の国水橋をとをし時。水橋とのゝ姫君。ぎやへいをつよくいたはり。存命不定におはせしを。此山ふしの中に。げんじやの上手あるにより。七日とまりかぢし。たちまちげんに付申す。是によつて財宝を。「カ、ル」本尊のまへに取かくる。「ツメ同」おぼつかなくは使者をたて水橋へとはせ給ふへし。浦の人々是をき。かやうに御のへあらんには。いつくにつめがさふはこそ。御身にてもまします。同行にてもまします。是非一人給はり。かまくらへぐそくし申さんと。声々(10ウ)

に申す。判官力に及はせ給はず腰なる貝をとり上て。二つ三つふき給ふ。かいのこゑもしつまりければ。上の山にかくしをく人々に。武蔵坊弁慶。常陸坊海尊。亀井片岡伊勢駿河此人々を先として。打刀斧鉞を。めんめにもつてみたれ入て。なにとてわほつしは。貝をはふくぞ。それ山ふしの貝ふくは約束かあつてふくものを。さふなふ貝をならす事。ひがことなりと申つゝぎけいの中にとりこめたり。判官きこしめされて。なふしつまり給へかた(11才)

。此うらのめん。此ほつし一人とり詰て。判官になれ。ぎけいになれと仰あれ共氏もしゆじやうもなきにより。ならしと申候を。たなれと。おほせ候程に。あまりせんほうつきはてゝたゝ今の貝をふいて候御めんあれと仰けり。弁慶か是をき。さてはきたひな事かな。はぐろのかたの山伏によしなき事を云付。判官になれ。ぎけいになれとは何事ぞ。とても事の事にてあるならば。直井千騎をわれらかすみかとなすへきなり。爰に立たる大夫殿。見しら(11ウ)

ぬ顔にはあたれ共。六ぢやう舟の船頭七月の始。あいたさかたを漕出し。八月の始。越前の国とかや。靄賀の津に聞えたる。清次かもとを宿として。七里半。あらちの中山海津の浦より舟を立て大津の上り大津の。がう大夫かもとを宿として。一年に一度つ。下り上りし給ふ六ぢやう舟の船頭と見ないた事はそらごとか。今こそこめは見るとも。明年の夏の比いつくにも参会。あらいたはしや此わんれいを申へしとからと笑ひければ浦の人々是をき。判官殿にて御座あらは我等か舟のつき所やはか(12才)

しろし召るへき。ことのこはらぬ其さき。こちこよ浦の人々と独りふたりにげて行。弁慶つゝいて追かけ大音あげて申様。何とてめんくは笈をからげて返さぬそれ山伏の懸笈は。私ならぬ事そとよ。嶺のはつだひ。金剛童子の乗移り給ふなる。懸笈をふじやうの身にて。取出し候らひて。只は置へきか笈からけてえさせよとつゝいておふて出ければ。手を合立もとりけんきに科がさふばこそ。何事をも打忘れて御免候らへ。少人も御ざあれは伝馬なんとの御用は。御めにかゝるへしと云。さしも剛成浦の人。御戒力に恐れて其後物を申さぬは理りとこそ(12ウ)

聞えけれ「コトハ」其後はうぐわんむさしをめされ。くがをゆかば此さきに。又ものうき事もあるへし。便船あれかすと仰ければ。弁慶きいて。殊の外にはらを立。惣して我か君の。爰にてはびんせん。かしこにてはびんせんと。便船このみし給ふによつて。かゝるむつかしき事も出来候。四国九国の御合戦は。皆ふないくさにて御ざ候らひし間。舟路の事をは。大略心得て候に。舟を買とりて。われと漕くたらんに。なにのしさひの候へき。判官げにもとおほしめし(13才)

。直井の太郎をめされ。此辺にあわよき壳舟やさふ御ひけいあれ。なを井承り。よ所をひけい申までも候らはす。小鷹隼波潜り。石割太郎呼子鳥とて。舟をはあまたもつて候御用にまかせてめさるへし。判官きこしめされて。そのこたかまるといへる舟。いかほともせよとて。ひそうにおほしめす御こしものを。直井の太郎にたぶ。直井御こしものたまはり。ふなぐそくひしくとしつくるひ。舟をしうかへては

やめされよと申とき「サシクトキ」十三人の人くは(13ウ)
われもくゝと召れけり。うかりける直井の津をことゆへなくこぎ出し。順風をえて帆をあげけり。雲海まんくゝとしてきわもなし。雲の浪霞のけふりわけかたく。蒼波猶道とをし。汀のうみは錦に似かりほく天に。飛にけり。いつれのせいげつか。よし経ともろともに「フシ同」かへらん事をえん事はかんせう。じやうのなかめなり。うら山しやなかり金は。八月にならほきこそせめ。よし経はいつのときにみやこへ。とてか帰るへき。せめて玉つさ計をは。こと(14才)

つてんとの給ひつゝ。哥をよみ詩を作り。梶をとり帆をあげて。波路はるかに。ふかれ行こゝろ。さしこそあはれなれ「コトハ」かゝりける処に。佐渡の国北山の嶽よりも。黒雲ひとつ立おゝう。風か雨かあやしやと。仰ける処に。越後の国ざわうだうの上よりも。雷電雲をひゝかす。あわけしきのわるひは。山影風のかくれ嶋「カ、ルツメ」いつくにかある舟よせて「同」此難をのかるへしと云。いはせもはてすして。大風梢を吹くたきなぎさに砂をとば(14ウ)

すれば平々としたる雲海に。雪の山こそおほかりけれ。水を天に吹上さかさまの雨とそなつたりける。上下舟に酔給ふその中にとつても。義盛と弁慶。二人計こそ。大はだぬきにはたぬいて。ともへに立てまはりけれ。いかにもして此舟を。磯へよすへからす。あら磯に舟をよせ。舟損してはかなふましい風にまかせて梶をとれ。帆ごもがかせにもまれは。ほわたをきつ。風をとをせ猶しもかせかはげしくは。大つな小綱切おとしともづな(15才)

ゆい付ひかすへし。とり梶より水いらば。おもかぢへのりなをせ。亀井片岡は戦場計の嗜にて。かゝる時には。前後ふかくに。見え給ふものかなやあ。舟底におり立てあかゆをなりとかへ給へ。縦このふねか。鬼界高麗契丹国へ。おとさるゝと申共。我々二人あらんすほとはなんの子細の候へき。我かきみと申す。判官聞召れて。あのよし盛と申は。いせの国のものにて。わたりの舟にならつて。舟路の事をはこゝろふべきが。ふしきやなむさしは。文にも武(15ウ)

にもたつしやなるか。舟路の事をも是程に。心得けるかふしきさよとそゝろにほめさせ給ひけり。「サシクトキ」あらいたはしや御前の。御身もたゝにおはせぬに。あらし波こわき風によはりはて。たけとひとしき御ぐしをなみと。「フシ同」なみたにゆりなかし。むつかるこゑも。よはりはて今をかきりと。見え給ふ。十一人の人々は。此よしを見まいらせ。実々夫婦の中程に。わりなき事はよもあらし。いたはしやごんぜん。みやこに御ざの御時は。七重の屏風。八重の木帳。九重の(16才)

まんの内。みすふきかへす。風をたにも人かといとひ給ひしに。今はいつしかかはりはて。かゝる遠国はどうにて。さてはて給はんいたはしやと。鬼神をあざむく。ともからも不覚のなみたなかしけり。「コトハ」かくて黒雲次第に引おゝい。ひとへに長夜のことくなり。今まてはありともおほえぬ舟ともか。その数あまたほの見えければ。たすけ舟かうれしやと。おほしめさるゝ処に。さはなくして。赤はたさしつれたるむしや共か。いか程もおほくわき出たり。ふしき(16ウ)

名古屋市立大学人文社会学部研究紀要 第二十号 二〇〇六年三月

におほしめすところに。舟の内にこゑあつて。宗盛父子是にあり。東国の九郎冠者恋しやと。呼はりかけ近付と見ゆる。能登殿とおほしき人。小船にかんとりめしぐし。近付と見ゆる。二位とのおほしき人。先帝をいたき申。たゝ今海底に身をなげんとて。義経のかたをうらめしけに見てたゝせ給ふ。弁慶是を見て。所詮は引導せはやおもひ。ふなそこにつつと入。頭巾鈴懸うちかけ。舟のへいたにつつたちあかつて大音上て(17才)

呼はる。「サシイロカ、ル」昨日は西の海岸にてたせいのなげきを見「ツメ同」けふは又。北国の江にして。がんぜんなげきをなす事は。夢まほろしのことし。有為の法はさなから。今ふく風のことくなり。むさのくわんをなすときは。いま立波のことし。大小のきろんは。かぜによつてかたちあり。一つの風かあれはこそ。おほくのなみのかたちあれ。風波の二けんは。まよひのまへの夢なり。一の海。空かいにしてしやうととなしとさとする時は風も波もあらはこそ。あふいた(17ウ)

はしや平家には。さんへき智者のなけれはこそ。多のをんりやうを。仏にはなさすして。しうぢやくのだうぢやうに。りんゑし給ふいたはしさよ。たゝ今申。弁慶か引導に付。発心の一りをさつて輪廻のきづなをはなれ。妙覚無為の位に。つかせ給へと申時。二位とのゝこゑとして。むかしは一天のこくもとしばんぜうのせいしゆとありしかと。いまは又みもすそ川のなかれゑんりはていに身を入し。しうたんのていきう。しつてのしうねんは。いさごより(18才)

四一

も猶おほし。是によつて六道おほくのさとをめぐり三途。はつなんのきうこふを。のかれかたく思ひしに。たゞ今申す。弁慶かいんだうにつき。発心の一理をさとつてりんえのきつなをはなれて。妙覚むゐのくらゐに。付たる事のうれしさよ。むかしはかたき。今はたうしとなり給ふいとま申てさらはとて。なみの底に入給へは風も波もしつまつて舟は小波にゆりすゆる。「コトハ」さる間御座舟を。いつくともなくをしよせ。あかりてとはせ(18ウ)

給へは。越後の国てらとまりと申す。跡へはもとらさりけりと御よろこひはかきりなし。此里人か申けるは。此さきにねすみつきの間と申て。よのはしめより候らひしか。鎌倉とのよりも。判官殿の御姿と。御内の弁慶のすかたを絵図にうつし。関所のまへに。高札を打てをかれてさふが。山伏の禁制かもつての外に候。弁慶聞て打あし。あふ此関屋をも。なにかしか計略にてとをらふするにて候。所詮熊野より下向する。先達と号し(19才)

。なにかしは伝馬に乗て通るへし。恐れながら我か君をは。あひの夫に作りなし申。中の蓑笠をおはせ申へし。十一人の人々は。笈すゝかけを取かくし。皆々男になり給へ。此儀尤然へしとて。十一人の人々は又もどのおとこになられけり。弁慶は伝馬に乗て。せきしよのまへを轟がけて通す。其日の関守に。石和の与一か候らひしか。関の戸をはたとたて。制札を御らんせよ。かなふましいと申て万事を捨てさゝへけり。弁慶は馬の(19ウ)

上よりも。大音あげて呼はる。都より此国まで。山の禁制とて。辻々

に札は立ぬれとも。此ほつしは。年々熊野へ参るとくにより。関守ともか見しつて。なんなふ是までとをしたるに。この関屋にてたゞ今「カ、ルツメ」討とゞめんとは何事ぞ。「同」くまのゝ権現はおはせぬか。関所のやつはらを。すくめてたひ給へと。いらたか数珠を取出し。さらさらとおしもんで。熊野のかたをふし拝む。せきもり上下おぢおそれおそろしの人のいきおい(20才)

や。此人々を関屋にて。討留めんと申共。国か半国ゆるき候らひても。一人もうつか。うたぬでこそあるへけれ中々の事をし出して。関所のもの共か。のこりすくなく討れては。何の用に立さふべき見ぬていしらぬよしにてお通しあれと申けり。いさわの与一か是をきゝ。実々これはいはれたり。いかになふ先達坊判官殿の御内の。弁慶といふ人にさせ給ひたる程にか様にか申たれ共。お通りあれと申て。関の戸を明て(20ウ)

通しけり。心の剛なるとくにより。鱧のくちをのかれて鬼神か門を出けるをほめぬ人こそなかりけり。「コトハ」その跡に判官との。中のみの笠をそゝろにおはせ給ひ。かた目をふさきかたこしを引。関所のまへをとをらせ給ふ。関守共か見まいらせ。爰に相の夫にさゝれたる男こそ。下す分の中には。生れ付たる判官とのなれ。たとへはこしを引はひけ。かた目たにもつぶさずは。上の判官殿よと一度に喰とわらひければ。十一人の人々は生(21才)

たる心地もまします。弁慶は馬の上よりも。大音上て申す。やあかうりき。さなきたに山の中は。村雨のしけきに。やゝともすればさが

つて。同者をぬらすふとふさよ 「ツメ同」 あゆめと云て持たる鞭にて。ちやう。／＼と打たりけり 「カ、ルフシ」 判官御覽して御身のやうに馬にのり。らくして下る人たにも。宿に付ぬれば。腰かいたひなんとゝて。人に腰を打する是程重き荷をおうて。えこそはあゆむましけれと。なく躰にもてなしいそかせ給ひ。ける (21ウ)

程に最上川にそ着給ふ 「コトハ」 さる間判官の。持せ給へる蓑笠を。かしこへかつはとすて給へは。弁慶はしりより 「サシクトキ」 中にておつ取三度いたゝきかうべを地に付。たばかりごとゝは申なから。正しく主君をうつ杖の天命いかてのかれ候へき。たゝ今の弁慶か狼藉をは。仏神三宝もゆるさせ給ひ候らへとて。鬼のやうなる 「フシ同」 弁慶か。東西をしらす鳴ければ。十一人の。人々も皆涙をそ。なかしける 「コトハ」 判官御らん有て。いかに武蔵殿。仏たにも因果をはのかれさせ給はず (22オ)

。ましてや末世にをいて。はかひの凡夫の身として。いかて因果をのかるへき。殊に是は。弁慶か打杖ならず 「片ツメ同」 舎兄頼朝のあそはす杖と思へは是を恨と思ふましはやゝ舟にのれやとて。河舟に召れけり。はるか河上に。鵜と申鳥か。あまたおりゐてあそひけり。御前御らんして。いかにむさし殿。あれなる石に。おりゐた鳥をは。何と云やらん。鵜と申鳥てさふ。御前聞召し一首の哥にかく計。最川いかなる神のちかひにや。ういたる石の。なかれさるらんとかやうに詠し (22ウ)

給ひて。いそかせ給ひける程に。あねわの松。かめわり坂に着給ふ。

名古屋市立大学人文社会学部研究紀要 第二十号 二〇〇六年三月

人々の嬉しさとへんかたはなかりけり (23オ)

愛知県知多郡内海町大道寺家

蔵本謄写校合了

昭和十年九月 (24オ)

【校異】

本曲の校異に使用した本は次のとおり。(内) 内閣文庫本、(毛) 毛利家本、(打) 打波本、(直) 直熊本、(藤) 藤井氏本、(慶) 慶応大学伝小八郎本

1オ ○弁慶を請せらるゝ―(直) 中のでいえ請せらるゝ ○武蔵安堵の思ひをなして今は笈を爰に―(直) 武蔵今わ安堵の思をなして笈を爰に

1ウ ○五十疋―(内・毛・打・直・慶) 三十ひき ○北のかたをはしめそのほか―(慶) 北の方巻きぬ二十疋武蔵がまへにつませらるゝその外 ○存するしさいの候こうする三月へに 是よりも都へ付てたべと申―(慶) 是より都へ数多の難所の候へば来為三月に着てたべと申す

2オウウ ○かなひ候ましそれをいかにと申すに 越中へのお下向はおもひもよらすと申す―(藤) かなひ候まじいと申す

2ウ ○能登と加賀との堺をは―(慶) 下道の間は加賀とのととのさかひ ○この舟に便船し―(内・毛・打・直) 天のあたふる処と

て此舟にひんせんし ○其日の内に能登の国鈴のみさきに
 (慶) 珠洲の見崎に程なく

3才 ○はたらけは―(内・毛・打・直・藤) うこけは、(慶) うご
 きければ

3ウ ○かやうにうこくみるをはいかてか御らんし候へき―(慶) い
 きたる海松和布をば何としてかは御覧すべき ○なにかしか徳に
 より遠国のはてにても―(内・毛・打・直) 遠国のはてにてもな
 にかしかとくにより、(慶) 遠国のはてにても義経がとくにより
 ○あら殊勝の御詠哥や候頓て―(慶) あらおもし(マ、)の御
 詠哥や候いで、義経も

4才 ○せきどうさんふしおかみ―(慶) 順礼なれば石動山ふしおが
 み ○越中の国に聞えたる―(慶) ナシ ○如何成津泊せき、
 にても―(慶) ナシ ○ふつつと叶ひ候ましい―(慶) ナシ

4ウ ○渡し守か見まいらせ―(慶) ナシ ○こぎわたし―(内・毛
 ・直) こき出し ○判官きこしめされて―(内・毛・直・藤) ナ
 シ

5才 ○さては船路ならでは行へきたよりもあらはこそ便船あれかし
 と仰ければ―(慶) 便船のたよりもあれかしとおほせければ ○
 天のあとふる事とて―(内・毛・打・直) ナシ

6才ウ ○あはれ実義経は―(慶) こはいかによしつねは ○きや
 うがいをかくしかねたる―(直) きやうがいをくくりかねたる
 ○かなしきよ―(慶) くちをしや ○まなひにて―(直) ふせい

にて、(慶) 風情して ○此儀尤然べう候とて―(内・毛) けに
 〳〵尤然るへう候とて、(打) けに〳〵尤然へう候とて(十一人
 の人々は)、(慶) 承ると申て

6ウ ○かたはらに立忍ふ―(直) 拾一人の人々わ傍にたちしのぶ、
 (慶) 十一人はかたはらにたちしのぶ ○直井の太郎か御迎に参
 りて候―(慶) 頼朝の御代官になをいの太郎が参つて候

7才 ○むかふばそつて猿眼に―(直) ナシ ○赤髭にましますと承
 及て候か―(慶) あかひげにて御ざあるが ○山ふしのぎやうそ
 う―(慶) 山ぶしの形像ちつともたがはず ○御出候らへ―
 (慶) はや〳〵御出候へ鎌倉へ具足し申さむとこゑ〳〵に申す
 ○さてはめん〳〵はまことに仰候か―(慶) ナシ

7ウ ○遥々とかまくらまで―(内・毛・打) 鎌倉まではる〳〵と、
 (慶) 鎌倉まではる〳〵と

8ウ ○いかにかた〳〵―(慶) ナシ
 9才 ○たゝねんころにさがせと申す―(慶) みな搜と申す ○道具
 候か―(慶) 道具候かさればこそ判官殿よとこゑ〳〵に申す

9ウ ○浦の人々はをき〳〵―(内・毛・打・藤) ナシ ○是もさそあ
 るらん―(直) 浦の者共承り、(慶) 是もいわれたりとて

13才 ○くがをゆかば此さきに又ものうき事もあるへし―(慶) ナシ
 ○便船あれかしと―(毛・慶) 便船のたよりもあれかしと ○
 殊の外にはらを立―(直) 腹を立(ミセケチ) ○四国九国―
 (内・毛・打・直・藤) 四国西国 ○四国西国の御合戦は皆ふな

いくさにて御ざ候らひし間舟路の事をは大略心得て候に―(慶)
ナシ

13ウ ○こたかまる―(他本) 小たか ○ふなぐそくひし〜と―

(内・毛・打・直) 我宿所に罷帰り舟くそくひし〜と ○しつ
くろひ―(慶) つかまつる

16オ ○御身もたゝにおはせぬに―(慶) ナシ

16ウ ○なみたなかしけり―(慶) なみだ堰不 ○さはなくして―

(慶) ナシ ふしきにおほしめすところに―(慶) ナシ

17オ ○能登殿とおほしき人―(慶) のとのかみのりつねは ○所詮

は引導せはやと―(慶) たゞ事ならず存れば引導せばやと

19オ ○鎌倉とのよりも―(慶) ナシ

19ウ ○此儀尤然へしとて―(慶) 此儀にしくはあらじとて ○十一

人の人々は又もとの―(慶) 十一人の人々はおひすゞかけを取か
くし本の ○せきしよのまへを―(慶) ナシ ○弁慶は馬の上よ
りも大音あげて呼はる―(他本) 弁慶是を見て

20ウ ○関屋にて討留めんと―(慶) 唯今うちとゞむと

21オ ○関所のまへを―(慶) ナシ

21ウ ○御身のやうに馬にのりらくして下る人たにも宿に付ぬれば腰
かいたひなんとゝて人に腰を打する―(慶) ナシ

22オ ○さる間判官の持せ給へる蓑笠をかしこへ―(慶) おはせたる

みのかさを ○いかてのかれ候へき―(慶) いかゞ候べき ○判
官御らん有ていかに武蔵殿―(内) 判官きこしめしてよし〜む

さし殿、(毛・慶) 判官御覧じてよし〜武蔵殿、(打) 判官聞し
めされてよし〜武蔵殿、(直) 判官御覧じていかに武蔵殿、
(藤) 判官御らんあつてよし〜むさし殿
22ウ ○御前御らんして―(直) 判官御覧じて

付記

名古屋市蓬左文庫蔵「幸若音曲本」の翻刻は今回で終了した。あ
らためて蓬左文庫に御礼申し上げる。